

ゐる。特に古跡保存會は、其後多くの人々の賛同と、土地青年團の協力に依り、今では立派な會堂まで、建設せらるゝやうになつた。

日向の次は岡山で、五月に入つて行つた。岡山市議事堂で、十日間連續傳道會を催す事となつた。青木君指導の下に百人近い、唱歌隊を作つた。丁度受難週中であつたので、斷食祈禱を以て事に當つた。中二、三日は、一寸緩ゆるみが來たが、全體として、頗る緊張したものであつた。日向の經驗により、青木君の音楽が、集會の準備を徹底的に行ひ、其後へ私が出て、極めて簡単に聖書の講義をし、最後に木村君が説教とアツピールを爲すのであつた。其間に又青木君の獨唱があつて、なか／＼調子よく整つた。岡山運動の結果は、五百名の決心者で、岡山縣全體として、千名の目標を定めた。この運動は、相當に人々の血を湧したもので、或者は、血書して千人の決心者を祈り、或夫婦は結婚リングを獻げて、傳道用に供へるなどした。

倉敷、玉島、天城、高梁、西大寺、笠岡、高屋、井原等を巡つた。津山弓削方面は、

岡山の前に行つたが、久世、落合、勝山方面へ行かなかつたのは遺憾であつた。そして幸ひにも、千名の目標に達する事が出來た。

岡山で一先づ、感謝會を開き、私は其足で、同志社へ赴任した。これは豫ねて交渉があつたのであるが、岡山諸教會の状況と、覺醒運動のため斷つて居つたのである。ところが原田總長の懇請と、岡山諸教會にも相當の實力が出來たので、覺醒運動だけは繼續すると言ふ條件で、遂に赴任する事に決した。赴任後はチョイ／＼暇を作つて、各地の運動に参加した。即ち新潟縣運動、丹波丹後運動、それから堺東京等へも出て行つた。上州へは木村青木兩君だけであつた。その内同志社の事が忙しくなつて來たから、私は全然關係を絶ち、程なく木村君は、組合教會の巡回教師となり、青木君は、日曜學校同盟の音楽部長として、活動する事になつた。

此覺醒傳道には、色々なエピソードがあるが、其中の秀逸は、岡山縣西大寺に於ける、横網太刀山との會見談である。

西大寺の會場は、芝居小屋を使用したと思ふが、丁度其時、大相撲一行が、近くの寺院内で興行してゐた。ところが宿が同じ車屋であつたので、一日太刀山の部屋を訪問する事にした。木村君は以前布哇で、太刀山一行を通譯してやつた事があつたので、かねて知り合なのであつた。

太刀山は青木君の聲に驚き「宗教家は聲がよくなくては駄目だ、俺の故郷富山では、聲のよい坊さんが、一番やんやと持て囃される。だが俺などに天國行は駄目だ。英語でベラ／＼やられては一向面白くない」と言ふや、木村君矢庭に立ち上り、

「こう太刀山、其方は相撲が上手だから、相撲を取つて見よ」

と神様が仰有るかも知れぬと結んだ。太刀山は、ちよつと度膽を抜かれたやうであつたが、程なく大笑となつた。若し東京で覺醒運動をやる場合には、一つ國技館を貸して貰ひ度い、など言ふと、宜しう御座いますと返事をしたものだ。

然るに翌朝、朝日新聞社通信員が來て、昨夜の太刀山との面會談をして呉れと言ふ

ので、詳しく物語つて聞かすと、數日後の新聞に、左の如き表題の記事が、大文字で掲載されてゐた。

「太刀山木村牧師に一喝さる」

それが東京朝日に轉載され、太刀山の後悔談となつた。其後布哇の新聞に、繪入記事となつて、太刀山が木村牧師から、洗禮を受けてゐる所と、弟子相撲連中が、酒樽を叩いて憤慨してゐる場面が出されたと言ふ事で、實に新聞記事程恐しいものはない。そしてこのやうな種を提供した、西大寺通信員は、其後拔擢されて、今は堂々とした新聞記者となつてゐる。太刀山は曾て何處かの教會の集會に出たところが、牧師までが自分を題にして話すので、決して教會へ足を入れぬと語つて居つた。今度の記事を見て、又々腹を立てるに違ひないといふので、木村君は早速手紙を送つて、辯明してやつた。

人氣者たる者亦難い哉である。

第二十章 同志社宗教主任

どうした譯か、岡山からは、同志社へ引き抜かれる者が多い。第一が金森先生、次が安部磯雄先生、そして第三番目が私である。

私は相當の困難を豫期して赴任した。岡山の覺醒運動で、疲れ切つた體を、一等列車の中で一睡して、京都驛へ着いた。下車すると原田總長も神戸からの歸途同列車で下車されて、列車内を隈なく、探されたが見付からなかつた、まさか一等車とは思はなかつたと、話された。充分に身體を休める事が出来たので、朝の就任説教も無事に済まし、すぐに東寮に住み込んだ。今まで、目の廻るやうな活動を續けて來た私は、十七年振りの學校生活に、言ひ知れぬ懐しさを感じた。

宗教主任の職掌は、大學認可當時制定された新しい役で、實際は、學校全體の宗教教育を擔任するのが、其任務であるが、同志社の習慣上、同志社教會の牧師兼寮務主

任と言ふのが、主な仕事で、東寮に住み込んだのも、寮務に關係するところがあつたからである。これ丈でなく、男女學生の聖書科倫理科をも受持つ事になる。かうなると無限に仕事が殖えて、遂には一日平均三時間の授業を受持つ上に、夜は寮の夕陽會とか、諸種の宗教的集會、其他病人や教會員の訪問、職員の移動に關する、世話までしなければならぬ。教會からは不平が起る、寮には絶えず問題があり、通學生の風紀にも、責任を持たねばならず、不良學生の調査、缺席生の取調等、三千以上の學生を相手に、容易な仕事ではない。

大正六年末、原田總長が、辭職されるといふので、私も同時に辭職する決心で、東京の靈南坂教會の傳道に參加した。ところが原田總長の辭任撤回となつた爲め、私の辭職もその儘となつた。其後總長は一身上の都合により、退職せられ、私は中村總長代理の下にその儘止る事にした。それにしても、何とか宗教主任の職務事程を明らかにせねばならぬと考へ、第一に教會牧師を辭し、平信徒の一人として説教を分擔する

事にし、寮務の方も、適任者を選んで専任とし、又聖書科、倫理科の方も、出来る限り、適任者に依頼して、宗教主任がなくとも差支へないやうに工夫して、それから渡米の願ひを提出した。これには一面、米國に於ける、宗教教育の實狀を視察し、宗教主任の性質を明かにするのが、目的であつた。一年の豫定で許可を受け、大正八年十一月三日に、横濱を出帆した。

同志社在職の三年間、私の心身を最も多く、苦しめたのは、所謂「同志社事件」であつた。同志社事件は、新島先生が、鞭を以て、自らの掌を撃たれた當時から、既に其萌芽を持つてゐた。私の同志社入學當時に溯るが、入學後三年目位、即ち新島先生の死後一年内外にして、大學東京移轉問題が起り、私なども京都方として、例の講義所を本陣に、大いに奮闘したものであつた。公會堂前の張紙合戦、校友訪問運動、公會堂大演説、遂には某學生の糺問彈壓、失踪、退學などで、結局京都方の勝利となつた。その色分けは、東京方には、政治經濟の色彩が多く、京都方は、宗教的傾向が、

多數を占めてゐた事は、争はれぬ事實である。次は科學と宗教の争ひが基調となつて、新舊思想の衝突、日本人側と宣教師側との分離となつた事は、既に前述の通りである。これは、原田總長の時代になつて、和解され、宣教師達も、再び學校に歸り來り、爰に久し振りで、同志社の隆盛を見るやうになつたのである。

同志社の經營に就いては、財政方面を援助する校友の多くは、政治經濟乃至科學方面の側に屬する人々が多く、之れを總理總括するものは、代々宗教家たる總長の手にあるのである。この現象は同志社のみならず、今日の社會は、總じて此珍現象に満ちてゐる。所謂俗人と稱せらるゝ人々が、孜孜として金を儲けて、これを聖徒の手で消費すると言ふ風である。ところが俗人の金の使ひ方と、聖徒の使ひ方とは、どうしても一致しない。これが抑々トラブルの最大原因である。

私が同志社在學中、政法學校で聞いた講義の筆記の中に、次のやうな珍文句がある。

「産業社會ハ私利ヲ以テ其基本トナスモノニテ慈善乞食ノ事ハ係ラズ」

「經濟上ノ動念……成ル可ク些少ノ努力ヲ以テ成ル可ク多クヲ得ント欲ス……但シ他ノ愛情慈惠功名心愛國心ナドノ強力ナル動念アツテ之レヲ犯スコトアルヲ忘ルベカラズ又習慣無識ハ不知不識コノ動念ヲ暗ニスルコトアリ」

之れに依ると、經濟の根本は、私利であり、此目的を達するに際し、愛情、慈惠、功名心、愛國心等は、其敵とするものである。之れを宗教側から見ると、この様な私利的經濟は、其敵とするところである。勿論同志社の總長と校友の多數が、先天的に敵同志であると、言ふのではないが、今日までの學說では、經濟と宗教は、兩立しない傾向を以てゐる。これは實に、アダムスミスの富國論以來の事で、今更事新しく言ふ必要はないが、此氷炭たゞならぬ經濟と宗教を、共同の壁の中に發育せしめやうとしたのが、同志社問題を起した所以である。其證據には、純宗教で立つ學校なり、純經濟或は純政治を以て立つ學校には、同志社に於て見るやうな、困難な問題は起らぬ。

それ等は先づ地位の爭奪とか、學生のストライキ位のものであるに過ぎぬ。

私は同志社問題のため、多くの犠牲者を出した事を、眞に痛惜して止まぬものである。

新島先生が、このやうな教育制度を始められたのは、米國式に基いたので、米國の大學は皆此通りの科目で教へてゐるが、たゞ米國は元來が宗教國であるから、一般人が宗教の權威に服する事を怪しまないが、日本に於ては其事情を異にしてゐるので、自然兩者の間に、了解を見失ふのは、當然な成り行きであらねばならぬ。

こゝに於て、私は猛然として、經濟と宗教の關係を研究せねばならぬと言ふ、一大衝動が起つたのである。けれども渡米一年で、この大問題が研究し盡せるものとは思はぬが、只研究の方針だけでも付けて見たいと思ふた。

第二十一章 シアトル日本人組合教會

岡山赴任後二三年にして、説教聴き巧者の會堂守三谷老人が、一日先妻磨智子を捕へて

「奥さん、金を御貯めんさい。牧師の説教に頂が見へかけたぞな、洋行々々」と説破した事がある。其頃渡米熱が盛で、岡山教會から、東方遜君、尾崎善藏君其他が、大志を懷いて渡米した。私は其志を懷き乍ら徒らに十數年を過した。

今度も留學の必要はないから、一年の漫遊で歸つて來いとこの事であつた。幸ひ、シアトルには、東方君と曾て岡山教會の執事であつた、其嚴父匡君とが居られるので、甚だ心丈夫であつた。出發前兼ねて約束して置いた、岡山縣の沙美修養會、江州傳道及び故山訪問をそれ／＼濟ませ、惠那山下の焼鳥に暫らくの日本趣味訣別をなし、千九百十九年十一月三日郵船香取丸で、横濱を出帆した。大庭猛君をはじめ、同志社校

友會諸君に一方ならぬ厄介をかけた。

二日間程は、出發前の疲勞を癒すため、又船暈を避けるため、ケビンで思ふ存分睡眠を食つた。波は相當に高かつたが、食堂を缺かしたのは、たゞ一回だけであつた。常に客室の一隅を占領して、永く飢えた頭腦を養ふため讀書三昧に耽つた。こうして十四日の航海はそれ程長くも感じなかつた。初めて、ヴィクトリヤの秋色に染め出された岩山の間に、ナショナルリーダー以來憧憬の的であつた、大小赤白の西洋家屋の散在したのを見た時、流石に心が躍つた。

シアトルに着いて見ると、東方君が出迎へて呉れて居つた。それに同君以外に、尙數人の同胞諸君が來合せてゐて、税關の調べ萬端色々世話をしてくれられた。この人達は日本人組合教會の人々であると言ふ事であつた。上陸後、東方君のホテルに厄介になり、東方翁にも久瀾を舒し、珍らしい所で相逢ふ人の運命の數奇を物語つた。其時此地の日本人組合教會が無牧である事、又一時私に講壇を受持つてくれぬかと言

ふ相談のある事も聞かされた。それで上陸當時の管ならぬ歓迎振りが讀めた。私は兎に角、海老名先生を桑港に訪ねる約束をして居つたので、少憩の後南下した。之れは同志社總長の候補者として海老名先生を推薦し、既に電報も送り交渉中であつたので私は同志社の現状を具さに陳情して、先生の決意を促さん爲であつた。

先生は新英州地方を巡回し、故新島先生の舊跡も訪ね、又海外に於ける同志社出身者の活動を見て、同志社の使命の大なるを思ひ、窺かに考慮しつゝあるところだ、と聞いて、甚だ力強く感じ、再びシアトルへ歸つて來た。それは、一二ヶ月英語練習の爲滞在中、教會の講壇をも引受け、又適當な牧師を推薦する積りであつた。幸ひ田中金藏君が、渡米を望んで居られたので、同君へ早速交渉を初めた。ところが同君は、南洋行きに方向轉換して仕舞つたので、甚だ失望して、更に他の人物を考へてゐる際、恰も排日運動が加州に初まり、次第に北上の勢を示し、同胞間には大變な混亂を起しはじめた。そこへ又、校友内田堯兄が一時歸國せられるといふので、一層の事同

志社に交渉して、私を永久の牧師に聘したいといふ事になつた。其當時教會が獨立して間もなく牧師を失ひ、危機に類してゐる實情と、更に排日に惱む同胞の實狀を見る時、此提案を無下に排する事は出来なかつたので、兎に角内田君に一任する事にした。丁度同志社は海老名總長が新任となつたので、直ちに交渉が纏まり、實に意外にも、シアトルは東方君一家の住居する所と云ふより外、何も知らなかつたのに、思ひ設けぬ、そのシアトルの地に腰を据えるやうになつたとは、これ實に神の不思議な攝理の然らしむる所で、かつて私が、

木曾山に 流れ初めにし 谷川の

淵瀬となるは 神のまにまに

と言つたのは、正にこの事である。

このシアトル組合教會は、殆んど同志社ボーイの巢窟で、又岡山教會に關係が深い。この教會の創立は、此地に共勵會世界大會のあつた時で、ベター宣教師、上代山陽女

學校々長及び共勵會幹事澤谷辰次郎君などの獎勵に基くもので創立者中には、内田堯、熊井隆之助、秋吉辰次郎、尾崎善藏等、同志社出身者多く、當時は尙それに池田正治、長尾進平、早川重太郎、橋口信一等の新顔同志社ボーイがあり、代々の牧師は、井上良民、速見藤助、安田忠清、清水久男等の諸君で、何づれも同志社出身である。そして米國留學の同志社ボーイは殆んど悉く、此教會を經由しないものはない。教會ホームには絶えず我黨の學生を收容して居つた。それで私には、この教會は我家にあると同じ感じを與へた。

所謂心機一轉で、私の視野は、全く舊世界から廻轉されて、此文明の尖端、東西兩洋の接觸地である、太平洋沿岸に集中せらるゝ事となつた。

千九百二十年四月には、再度の世界漫遊の途次にある、木村清松牧師を聘して、教會擴張の大運動をなし、殆んど全員の倍加を見るやうになつた。又白人教會を巡回して、排日の無道を側面的に訴へた。一旦南下した木村君と、シカゴに再會を約し、私

も一度、東部を巡回して、其後シカゴに落付く積りで、五月シアトルを出立した。

シカゴでは、ムードーインスチテューションの大會に出席し、先着の木村君を、ポール、レダー牧師と共に、其講壇に見出し、レダー牧師の大奮闘を目撃した。けれどもレダー牧師の大雄辯を以てしても、一向に改悔者が出なかつた。之れは禁酒法通過後の、一般傾向であつたらしい。ピリーサンデーの運動も、昔のやうには人が動かないと言ふ事であつた。其後レダー牧師もムデー派を去つたが、昨今は餘りその消息を聞かぬ。

デトロイトで、木村君の舊師ホワイト師に出遭ひ、其處のシテイミツションで、二人が話した。「ナイヤガラ瀑布の所有者を父に持つ、木村牧師の説教を聴け！」と言ふ廣告を撒いたのは此時である。

パツファローに、浸禮派の年會があつたので、一寸立寄つた。所謂ファンダメンタリストとモダニストの争論の最中で如何にも騒々しいもので、とても日本の組合教會

總會などの及ぶものではない。先づ日比谷原頭の蛙鳴蟬噪に近いものであつた。別館に各國の宗教博覽會があつたので、廻つて見ると、日本部に、眞黒に煤びた大黒の像が飾つてあつた。其前に二三人の黒人が、之れを眺めてゐたが、私にこれは何か、と質問したので私は、之れは大黒天と言ふ福の神で、日本ではこのやうな黒い人を、大に尊敬する、玄人くろごと言ふのはエキスパートの事で、素人しろうととはグリーングリンの事であると説明してやると、非常に喜んで、ジャバニース、オーライと連呼した。

ニューヨークに暫く滞在して、ポストンに於ける組合教會三百年祭に列する爲、途中ハートフォードに立寄り、此處で客死した、故杉田讓治君の葬儀に列して萬斛の涙を搾らされた。此式には金森先生、二瓶要三、海老澤亮君等も出席された。

ポストンでは、ケムブリッジのエマルソンと言ふ人の家に、木村、海老澤の二君と共に客となつた。私が高軒をするので、木村君は同宿を恐れた。其夜は止むを得ず、私を別室に隔離して寝に就いた。翌朝食事の際、海老澤君に向つて、昨夜安部君の軒を

聞いたかと尋ねると、安部君のは知らないが、木村君の軒を聞いたと言ふ事で、大笑ひとなつた。木村君も相當やつてゐたのである。ところが私と同宿する時、翌朝起きて見ると、スリッパ、スタッキング、其他雜誌などが、夥しく枕許に積むである。之等は私の軒を止めるために投げつけたものだ相だ。種々なものを投げつけられても、目を醒さない私は、神經遲鈍の點に於て、慥かに木村君より一枚方上であつたに違ひない。其後木村君が旅先から、一つのカーツーンを送つてくれた。それは、父親の許に寝て居つた子供が、軒のために寝られぬので、母親の所へ泣いてゆくと、可愛さうにバ、の軒にはお前も閉口するだらう、マ、の所で靜かに寝みなさい、と言つて寝かせてくれたはい、が、程なく母親がゴウ／＼初めたので、子供は外に出て泣いてゐる、と言ふ畫であつた。曾て、日向の延岡で「神の爲なら、どんな事でも、決して不平は言はぬ」と言ふ説教の最中、木村君が突然跪づいて「神様もう決して船がどうのこうのとは申しません。私の我儘を許して下さいアーメン」と祈つておいて再び説教

を續けた。聴衆は何の事やら、さつぱり判らなかつた。けれども私は、木村君が、細島から飢肥への小さい船を考へて、絶えず愚痴をこぼして居つたから、可笑しい中にもその率直さに感心させられて居つた。今度の事も、同じ寸法である。

ボストンの組合教會三百年祭では、日本國旗が出て居らなかつたので、木村君が主唱者となつて、談判をはじめ、結局一番目につく所に、日章旗を掲げさせる事にした。其後ロスアンゼルス市の、世界日曜學校大會の時にも、これと似た事があつたが、日章旗は餘り明白すぎて、一寸氣が付かぬかも知れぬ。

大會は初め、メカニックホールで開かれたが、會場が大きすぎて、バルトン博士と他一二の人のみが、全會場に届く聲を持つて居つたが、ガルヴィー博士を始め、英國側の入々の聲は一向聞えなかつた。後、會堂の中央へ、講壇を移したが、それは反つて悪かつた。遂にニューオールサウス教會へ移した。大分小さくなつたと言ふ考へで、木村君は極めて低い調子で、開會の祈禱を初めたが、一向響かないので、改めて調子

を高くした。海老澤君は日本を代表して、會場の隅々まで達する、明瞭な演説をやつた。

機會さへあれば、排日問題を持ち出して、公論に問ふ筈であつたが、英米の折衝が濃厚であつた爲め、日米關係は殆んど、眼中に措かれなかつた。

大會後、私だけはハーバード大學の夏期講習會に出席の爲め、一人で大學の近くに寓居する事にした。

第二十二章 米國の瞥見

夏のハーバードは、京都に於ける同志社に似て、なか／＼暑かつた。講習會は、専ら實地傳道に従事してゐる、教職者の爲めであつて、デイン、フェーレを初め有力な博士達が講師として出席し、外交學者ウイルソン博士、統計學者バブソン氏等の顔も見えた。従つて世界大戰後の問題が、自然花を咲かせた。ウイルソン博士は外交者として、バリー會議へ出席した人であるが、日本の外交は、握り拳の如く、一塊りとなつた外交であるに反し、某國の外交は、平手で叩くやうな外交である云々と言はれた時、私の隣の米人は、顔を顰めて私を視た。

レーキ教授は、アモスの講義をし乍ら、ポロリ／＼と涙を流し、今や預言者の聲は、教會の壁より外に、出ないやうになつたと叫ばれた。其理由は語られなかつたが、時恰も大騒ぎをやつた世界的大教化運動が、三百萬弗の負債を以て、破産を餘儀なくさ

れた頃で、ピツスブルグ製鐵場の内幕暴露の結果、ウォールストリートの資本家と、主なる宗教家との間に、一大破綻を生じた間際であるから、私には如何にも沈痛に感じられた。

講習會終了後尙一ヶ月内外滞在して、圖書館と本屋の間を往來し乍ら、シアトルへ歸つて後の研究資料を蒐集した。其傍らコンコルドの舊蹟を訪ね、エマルソン、ホーソルン、トロロー、アルコット等の遺風を、心ゆくばかり偲び、あの白樺の茂みなど、忘れる事の出来ない印象となつた。

ホーソルンの住居の裏道を登つて行くと、小山の上に、松の樹を主として造られた涼み臺風の詩作亭がある。何と言ふ自然の聖堂であらうか。こんな所から彼の詩が湧いて出たのかと思ふと、懐かしくて堪らなかつた。この忙がしい世界を逃れて、何時この様な境地を恵まれるであらう、など考へて立ち去り難い氣持で、久しくそのあたりを徘徊した。ロウエル、ロングフェロー等の舊屋や記念碑も、大學の近所にあるの

で、朝夕の散策に其風韻を呼吸した。ゼームス兄弟の墓は、ケムブリッジセミタリーにある。此處へゆくと、京都の東山を廻るよりも、もつと多くの知人に逢ふ心地がした。ヘンリーゼームスの小品集を携へて、チャーレス河邊に瞑想すると、繁雜な世界に住む事を忘れて仕舞うやうであつた。其小品文中に「マドンナ、オブ ジ、フューチャー」と言ふのがある。兄のウィルリヤムは小説のやうな哲學を書いたが、弟のヘンリーは哲學のやうな小説を書いたといふ事である。此マドンナも哲學めいた小説である。これに讀み耽つてゐると、すぐ前の繁みの中で、數人の女の聲が、如何にも淫靡な調子に響く、出て行くのを見ると、黒い女の一群に、白人娘が一人混つてゐた。彼方のベンチでは、二人の下等な娘が、二人のレデーに席を奪られて、やけ氣味で芝生に寝ころぶのを、チラリと見た。變に思ひ乍らも、再び書物に目を落した。物語は、フロレンスに客死した天才セオバルドが、想が餘つて、腕及ばず、餘りに完全を期したので、遂に何にも作り上げず、只一婦人の爲め、其死んだ幼兒の顔を即興的に書い

たものを、天才の片影として遣つたのみであると言ふ筋である。讀み乍ら、頭に浮ぶものは、同じ型の先輩同輩或は後輩の姿であつた。

ケムブリッジから地下線でポストンのコムモンへ出で、其處で日曜の午後の音樂を聞いた後で、ヒリツプス、ブルツクスのトリニチー教會を初め、多くの歴史ある教會廻りをするのも、圖書館美術館を訪問するのも、シンフォニーホールの交響樂に耳を傾けるのも、兎に角ポストンは三百年の都だけに、内部生活に訴へるものが多い。京都程には古く思へないが、東京の三百年に比較すると、遙かに錆が付いてゐる。

一日ユニテリアンの教會に出席したが、日本の組合教會よりも、モット古風な儀式を守つてゐる。けれども合唱隊中には、職業者を雇つてゐるらしかつた。主な歌ひ手の一人の女は、牧師の説教中、しきりに一人の男に相手を求め、注意を自分の方へ惹き付けようとしてゐるのが、男の方は動ともすると、牧師の説教に曳かれて行かうとする。殊に其日の説教主題は、當今男女青年の自然主義的傾向を攻撃したもので、説

教者は一生懸命に説いてゆく、併し背後の歌姫の事は少しも知らぬ。たゞ聴衆側から見てみると、此歌姫と牧師が、一人の男を奪ひ合ひをしてゐるやうに見えた。女は色々な工夫をして、男を自らの方へ奪はんとしてゐる。けれども遂に説教が高潮に達した時、男は全く説教に惹き付けられて、女の方には少しも相手にならなかつた。そして説教者は確かに勝利を得たのである。けれどもその背後にある活劇は、本人の知らないものであつた。

大學のチャペルでは、夏期中も、毎朝禮拜が行はれてゐたので私も時々出席した。或朝絶世の美人が、私の少し前の椅子に腰をかけた。西洋人は概して、一寸見たところ美しいが、暫く見てみると、だん／＼その粗雑さが見えて來るものであるが彼女は何處から見ても、確かに美である。私丈がそう思ふのでなく、其すぐ隣にゐた黒人學生が、すつかりチャームされて仕舞つて、どうしても目を離さない。美人は、極り悪がつて、反對の方へ向いてゐると、其儘デット横顔を見てゐる。女がチャット顔を向け

ると黒人はチャット下を向くが。女が又他を向くと、直ぐに女の顔を眺める。このやうな事をして數刻、女は遂に席を立つて出て行つた。すると男も又其後に従つて出て行つた。

私はこれを見て怖しくなつた。如何に美といふものが、人を動かすものであるか、あの黒人を、白人中に自由に混せて置く事は果してどんな結果を生むか、そのリンチ騒ぎの、今尙止まないのを見ると、多少此邊の消息を考へる必要がある事を思つた。けれども此話を以て、直ちに私を此黒人と一緒にされては困る。私は屢々黒人と間違へられ、彼等から仲間扱ひにされた事を光榮とするのであるが、或劇場では、レザーブドシートから退去を命ぜられた事がある。それは私を有色人種と見た爲めではなく、レザーブドシートは黒人の爲め特設された所で、私の如き白哲人は、入場を禁じられてゐるのである。日本では兎角黒い黒いで閉口させられ、現に須磨から岡山へ歸つた時など、あんな顔で、講壇に立つても好いかどうかと、一部の人々の間に問題に

なつた位であるが、米國へ来たお蔭で白い方へ廻された。

アインスタインのリレチヴィチーは、有難い學説である。

ボストンからウースターを通り、アモスト大學に新島先生の昔を偲び、スミスカレッジ、マウントホリオーク等を訪ね、メリーライオンの高風を偲び、又アンドバー、ヒリックスアカデミー、エール、コロンビア大學等を廻り至る所で其宗教教育の實狀を調査して、同志社への報告の材料にした。けれども餘り得る所は無かつた。只社會全體が宗教的である爲めに、學校内の宗教も、自然に盛んではあるが、學校其物としては、餘り整つた制度は出来て居らぬ。同志社のやうに、自ら宗教を生み出して、社會そのものに、供給すべき立場にあるものは、自然別種の制度を設けねばならぬ。けれども私には、それに關して何等の成案も出来なかつたのである。

其後、ヒラデルヒヤ、ワシントン、ピッツスボルグ等を歴訪して、再びシカゴに出で、デンバー、ソルトレーキを廻つて九月十三日シヤトルに歸つた。其間私の頭を支

配したものは、寧ろ産業社會と宗教の關係であつた。人格主義諸教育機關の完備は、今更喋々を要しない。

けれどもアンドバーで見た、エベレット製絨會社や、ピッツスボルグの製鐵所等によつて代表される廣大な産業社會が、人格を無視して、機械萬能を其極度にまで、發揮してゐるのを忘れる事は出来なかつた。

そして世界教化運動を破産せしめたものは、實に之等の産業機關であつたのである。

第二十三章 排日の原因

千九百二十年の秋、加州の排日土地法案が、一般投票に附せられた。私はシアトル日本人教會同盟の代表として、加州在住一般同胞慰問の爲め、南下を命せられたので、加州至る所の同胞所在地を巡廻して、充分に排日の諸相を研究する事が出来た。其後オレゴン、ワシントン、アイダホ等の諸州も同様の排日案を通過した。

千九百二十四年、例の絶対移民禁止法案通過の際は、我シアトル組合教會創立十五年紀念運動として、聲樂家澤山哲二君を同伴し、アイダホ、ワシントン、オレゴン、カリフォルニヤ、ハワイ、バンクーバ等を巡廻した。此運動には約半ケ年を費し、教會の方は岩上齊助君に留守役を頼んだ。「無抵抗主義精神同盟」と稱する小冊子一萬部を印刷して、排日に對して同胞の採るべき方針を宣傳し、傍ら更に一層精細に、同胞の實狀調査を遂げた。巡回中、無抵抗主義精神同盟者約二千名を得たので、これを基礎

に「精神生活と産業」と稱する月刊雜誌を發行し、以後二ケ年間、排日法案通過後の、同胞指導に就いて、微力を盡した。

今是等調査事項を詳細に記述する時は、忽ち一大冊子を爲すので、之れは他日に譲り、約十年間に亘る研究の結果を、一言にして言へば、經濟の一語に盡きると思ふ。之れは多少私自身が、此問題に傾注してゐる爲めかも知れないが、併し、之れは机上の空論に非らずして、事實に立脚した、云はゞ科學的論斷であると言ふを憚らないのである。

勿論、東洋人てふ、人種的偏見の存在する事は、争はれぬ所であるが、若しそれが眞の排日の原因なれば、既に、支那人の排斥されたと同時代に、排日が起つた筈である。ところが、日露戦争世界戦争後に於て、日本民族の實力が、異常な發展を遂げた際、突如として此風雲を呼び起したのは、人種問題以外に、他の的確な原因の存在してゐる事を、證明するものである。そして之れは、私の調査に依れば、確かに經濟問

題なのである。

現にモンタナ州は、煽動的政治屋の爲に、排日土地法案は通過したけれども、排日の気分は何處にも見られなくて、日本人は極めて好待遇を受けてゐる。そしてその大なる理由は日本人の經濟的實力に歸因してゐる。即ちホテル、ラウンドリー、レストラン、パーバーシヨップ。グロサリー、グーウオーク等、何をやらせても、必ず相當な成績を擧げてゐる。殊に農業に於ては、其技能は拔群である。そして此地方では、大體米國人を相手としてゐるが故に、其貯蓄された金は、土地の銀行に預けられ、又必要品は、悉く其土地で購求し、時々シアトル地方から、味噌醬油米其他日本物を輸入するに止まつてゐる。故に日本人は有力な地方經濟の支持者で、或る所などでは若し日本人に市民権があれば、必ず市長に選舉するとまで言つてゐる所もある。モンタナ以東に於ては、東へ行く程日本人の氣受は好い。之れは日本人との關係が薄く、其經濟を米人と共同にして、大に彼等を援助してゐるからである。けれども西海岸に

近づくに従つて、此問題が悪化してゐる。即ち日本送金が自由に出来る爲め、儲けた金は直ちに故國へ送り、日用品は凡て、沿岸の日本商店より取寄せ、其土地の物貨は少しも使用せず、只毎年米國銀行から金を借りて、米土と其凡ての利益を利用し乍ら、翌年は再び無資本の姿で、同じやうに金を借りて使用し、何年経つても、其家屋なり、周圍は改良されず、全然ベッドバッグの如く、米國の血を吸ふのみと言ふ有様の土地に、必ず排日が起つてゐる。

曾て、加州ハリウッドの長老教會で説教をして居つた時、一老人が説教後私を捕へて、「俺を覺えてゐるか」と尋ねた。思ひ出せないでゐると坂本と名乗つた。それで、昔同志社に二年程一緒に學んだ事のある坂本義助君と判つた。彼は同志社を中途退學して、程なく渡米し、今はこの近くのソウテルと言ふ小さい町で、グロサリーをしてゐるとの事である。坂本君の言ふには、俺の所へ來て見てくれ、排日なんて薬にしたくもない云々。そこで一日訪問して見たが、坂本君の住宅は、近隣の米人に少しも遜色

ない立派な家で、その周囲のローンも奇麗に出来てゐる。老母も呼び寄せ、一家多人數で大變繁昌をしてゐる。坂本君曰く、俺の金は皆此土地の銀行に預けてある。學校教會其他土地の公共事業には、必ず相應の寄附をしてゐる。俺がこの土地を去ると、少なからずこの土地の經濟に關係する。俺の店が繁昌するので、近隣の者が、皆喜んでゐる。何故なら俺の店へ來る者は自然に近邊へも立寄るからである云々。如何にもその通りに違ひない。但し坂本君は純日本人で、洋服は着てゐるが、その着様は純然とした田舎者で、スウェーターなどは、ボロ／＼に破れた所が見えた。併しそんな外觀などは問題でなく、彼は此土地に無くてはならぬ、經濟力なのである。

日本人が米國人の爲め、經濟力となつてゐる地方では、排日は無いばかりでなく、たとへ排日法案が通過しても、之れを適用する上に於て、米國側が困難を感ずるのである。南加イムベリアルバレーの農業、サンデアゴ近海の鮭獵、オリムピヤの牡蠣採取、ワシントン、オレゴン製の製材業等は、到底排日を行ふ事が出来ないのである。特

にハワイの砂糖黍、バインアップル、及珈琲は、日本人無しでは其産業的能力を繼續してゆく事は出来ない。

元來日本人は、農業國民である。其長年練磨した所謂小農主義は、アメリカの粗暴な大農主義の間に伍して、非常に堅實な地盤を築きつゝある。即ち資本の無い結果、極めて狭い土地を手に入れ、それをよく利用して、それで一年の生活費位は必ず儲けるのである。幸運な時は、相當の利益を收めて、次第に發展の基礎を作り、一旦其土地に入ると殆んど出てゆく事をせず、所有權の有無に關せず、其土地より収益を得て、年々立派に土地代其他を拂ひ得る能力を、見事に發揮してゐる。けれども、大農主義に従ふ者は、時に大儲けはするが、大抵は外れる事が多くて、其結果耕作者が次ぎ々々と變り、地主には非常に不利益なのである。日本人でも此賭博的大農主義に入つたものは大抵失敗した。昨今土地所有權は勿論、借地權すら剝奪されたに係らず、尙依然として其土地に止り得るわけは、全く此實力に依り、地主がどうしても離さぬ

結果に外ならぬ。そして遠からず、第二世の市民権を使用し得る時が来るのであるから、排日法ありと雖も、格別の脅威を感じないのである。私は以上の見地に基き、故國送金の非を叫び、永住決心、日米親善、共存共榮、及び日本民族特色技能の發揮を鼓吹した。幸ひ、日本爲替の平調を得るに従ひ、故國送金は段々減少するやうになり、永住決心も、其子女の成長と共に、自然に強固となり、日曜學校出席者などは、驚くべき勢で増加し、第一世の間に於ける、基督教も、相當の進歩を見るに至つた。私はシアトル着任早々、ヤキマ平原の未開拓を聞き、毎月一回出張して、宗教運動を初めたのであるが、一面排日と相俟つて、傳道の方は非常に好調に進んだ。九ヶ年にして、ヤキマ市に組合教會一つ、ワバトに美以教會一つが建設さるゝに至つた。けれども絶対排日移民法通過は、國粹的反米主義者に、好餌を與へる事となり、佛教宣傳日本舊慣の復活など、新進の氣勢を注ぐものも起つて來たのである。

斯のやうに、排日法案の下にあつて、尙ほ能く、比較的平康を得た我同胞は、更に

又新しき難問題に遭遇した。それは第二世の將來である。

元來渡米同胞の多くは、一時的成功を期し、幾年かの後には、錦を衣て故郷に歸る考へであつたのが、事志と違ひ、遂に妻を迎へ、子女を得て、永住とまで漕ぎつけたのである。そして、只第二世即ちアメリカ生れの者のみが、米國市民権を有し得ると云ふ事實が、歸化権の無い、土地所有権の無い、そして絶対移民禁止を喰ふた沿岸同胞に取つて、唯一の希望の綱である。ところが其教育法に就いては彼等の心を傷めねばならなかつた。久しい間、絶対に米國市民としての教育にのみ没頭すべしと言ふ議論が盛に行はれ、其教育を受けた青年男女が、偕て就職の段となつて一頓挫した。彼等はやはり日本商館や、第一世の事業に關係するので、純米國式だけでは何の役にも立たぬ。そこで日本語の教育、日本に關する知識が必要となり、これが國語學校の奨勵、日本紹介の運動となつた。私も大いに感ずる所があつて、幻燈、繪ハガキ撮影器を携へて、絶へず日本紹介に力を盡し、今尙之れを試みつゝあるのである。

ところが更に困つた問題は、縱令第二世が日米兩國の言語に通じ、又何づれにも融通の利く人間となつたとしても、段々烈しくなる世界的失業の事實に直面しては、最早如何ともする事が出来ない。これは單に沿岸同胞の問題でなくて、實に世界的經濟問題である。

私は此實際問題に接觸して、初めて眞剣に、永年の宿題であつた、宗教と經濟の關係を研究せねばならぬ事を自覺した。

以下に論ずるものは、未だ甚だ不完全なものであるが、マルクス主義、共產主義の盛に叫ばれる、時代に於て、我基督教界から、何等的確な答案が出ないのは、甚だ遺憾とするところであるから、敢て不備を顧みず此試みをなすわけである。私は素より、經濟學者ではない。たゞ基督教者の一人として、此人間生活の最大現象を、卒直公平に取扱ふに外ならぬ。誤ちは之れを改むるに憚らない。敢て、大方諸君の教を乞ふ所以である。

第二十四章 宗教と經濟の關係

京都鹿ヶ谷一燈園の庵主、西田天行師には、在京當時、屢々教を受けた。彼は宗教的經濟問題解釋者の第一人者であると思ふ。同師が其故山の社殿に於て、斷食してこの解決を祈つて居つた時、圖らずも嬰兒に乳を與へる母の満足さを見て、自然の經濟は、此母子に於けるが如く、飲ませる者も、飲む者も、共に満足して其生を樂しむるので、決して相奪ひ、相殺す筈のものでないと言ふ、一大眞理を發見され、それ以來此眞理に基づき、托鉢生活を以て、其宗教と經濟生活を、結びつけられて居るのは、皆人の能く知るところである。私は三年前歸朝した時、鹿ヶ谷を訪ねたが、師に會見する事は出来なかつた。其庵室は、昔ながらの陋屋であつたが、他に有力な宣傳所が幾つかあると言ふ事であつた。

岡山に居つた際、此問題に就いて、石井君と相當に論じた事があるが、何等具體化

したものはなかつた。其後大原孫三郎氏が、社會問題研究所を設立せられ、今尙有力な學者諸君が、専心研鑽せられつゝあるは、多少石井君の發意に基くところが、ありはしないかと思つてゐる。石井君は大阪に於ける、社會事業經營畫策中、他界の人となつたのである。

渡米後は、ローヤジバブソン氏の議論に多くの興味を持つた。氏は宗教が經濟力に關係深い事を主張する點に於て、特種の地位を有する人で、組合派に屬するレーマンとして、私は其所説に注意して來たのであるが、千九百三十年十二月廿八日、同氏の發表した、三十一年度に就いての豫想中に、次のやうな言がある。

「アメリカの國難は、其物質主義に存じてゐる。民衆は今や其生命と頼みし物質的富の消失と精神的富の缺乏により失望に沈みつゝある」。

そして、失業問題解決法として、職業紹介所設置、失業者教育及び政府資本家共同の最低賃銀支給を提出してゐる。此教育奨励は、氏の主張たる、精神的富の缺乏を補

はんが爲めである。幸にしてアメリカでは、失業者が暴動化するよりは、此時を利用して讀書せんとするやうな人々が、決して少くないから、バブソン氏の提案は、必ずや事實化する事と思ふ。そして將來產業界に、精神的富の生産をも加味するやうになれば、必ずや何年目にか襲來するに決つたものと考へられてゐる。經濟界の恐慌を絶滅して、健全な社會生活の發達を見るに至る事が出来るかも知れない。精神的富の生産を物質的富の産業に加味した、最好き適例は、丹波何鹿郡の郡是製絲會社である。同會社は社長と宗教教育主任とを同格に取扱ひ、製絲上の技能々率を尊重すると同様に宗教々練を重視するのである。女工の精神生活が、其製絲生産に對する影響に於て、極めて顯著なものである事を明かにし、精神的教養に投資する程度は、製絲技能のため投資するのと、少しも變りない。又繭の善惡は生絲の善惡を左右する故に、最上の繭を手に入れる爲め、地方養蠶家に對し、養蠶技師を送るやうに、家庭及び部落全體の風儀及其精神状態を、改善する目的を以て、宗教々師を送る事に資力を投ずるの

である。何故なら、家庭、部落の風儀精神状態の如何は、直ちに繭の性質に關係するからである。こうした郡是製絲の結果は、米國に於ける機業會社の製品に影響するので、其注文に違反しないだけの製絲能力を、先づ以て精神的に涵養せねばならぬ。即ち製絲會社一ヶの産業は、養蠶家と機業家とに密接な關係ある事を精神的に感得して、責任上、必ず其要求せらるゝだけの要件を充たす事に努力するのである。このやうな精神的産業は、決して恐慌に襲はれる心配はない。生絲の人間生活に需要せらるる間は、必ず永續を全うするのである。

大體是れ迄の産業は、出来る丈少い勞力で、出来る丈多くの利益を得んとするを目的としてゐる。爲めに勢ひ、粗製濫造となり、サボタージュとなり、勞銀の値上げ、或はストライキとなるのである。この弊を防がん爲め、資本家の方では、ストライキを起さない機械力のみを頼み、人力を能ふ限減少せんとするので、其結果、失業者の増加、生産過剩、物價低落となり、遂に株式暴落、産業休止と云ふ恐慌時代を惹起するの

である。

若し「最少の勞力を以て最大の利益を得る」と言ふ方針を、精神的に解釋するならば、必ずしも害惡の源とはならぬ。即ち肉體的勞力は、成る可く少くして、人間能力の最大増進を計る事を眞の利益と見るのである。換言すれば、機械を以て省き得る勞力は、之れを精神的生産の方へ轉換するのである。すれば、失業者を出す事なく、最善の産業を永續せしむる事が出来るのである。

若し之れを教育機關に引き直して考へて見れば、學生の資金を得るのに、父兄の送金を待つに非らずして、學校の工場に於て、一日二三時間労働し其賃金を以て、他の時間を勉強に充てると言ふ風な事にする。即ち工場兼學校と言ふやうなものにするのである。こうすれば機械が完備する程、人力の消費は減少して、其代り高等な精神能力が、十分に使用せられ、其結果精神的富が、大いに増進するに至るのである。但し世には、物質的富のある事を知つて、精神的富の存在を知らぬものが多し。

次章に於て、富の問題を研究する事にしやう。

第二十五章 富とは何ぞや

今私はヤキマ平原の富と言はるゝ、林檎の一つを味ひつゝ、此稿を草してゐる。此林檎の種子は、林檎の生命存続の爲め、大變必要なものであるが、私の爲めに此石のやうに堅い種子は、何等の富ではない。私の爲めには其芳醇なフレーバーのある果肉が富である。併しこの富は消費さるゝ時、其姿を失ひ、又一年内外にして、腐敗に歸するものである。此林檎の果肉を乾燥して、ドライアップルを作る時は一年以上保存する事が出来る。併し永久保存は難しい。永久保存を全うするには食用にならない。種子を保護せねばならぬ。そして果肉其物の目的も、その實は種子の保護にある。即ち種子が成熟するまで、此果肉に生氣を維持し、種子が成熟期に達すると共に、果肉も成熟するのである。只種子は永續のために成熟し、果肉は成熟と共に腐敗死滅に向ふのである。我等人類はこの腐敗成熟に向ひつゝある。果實の一定時期を選んで、

之れを食用に供するのである。即ち種子の方から言へば剩餘價值であり、人間の方から言へば天地の恩恵である。此剩餘價值若しくは恩恵を、適當に人間の中に分配するのが、即ち經濟である。故に富の分配には剩餘價值の分配と、恩恵の分配との二面がある。その如く、又經濟にも二面がある。即ち物質的經濟と精神的經濟とである。今此の二つを他の實例に就いて説明しよう。

先づ魚に就いて見よ。魚の潑瀾として、川の瀬を上りゆく雄姿は、其體内に畜積された種子の勢力の餘澤である。以て賞觀すべく、以て繪にすべく、又音樂とも文學ともなるのである。此方面の價值分配が、精神的經濟に屬し、又此の魚を生獲つて、市場に賣買するのが、即ち物質的經濟である。故に物質的經濟は、魚の永續に資する事をしない。寧ろ之れを極度に行ふ時は、魚の全滅を見るに至るのである。然るに精神的經濟は、之れに永續の機會を與へる。即ち川上まで、其性的舞蹈を樂ましめ、産卵せしむるのである。そして魚が産卵し盡す時は、其剩餘價值は、既に腐敗死滅に近づ

きつゝあるので、市場に出しても賣買の價值を持たぬ。

更に一步を進めて、之れを鳥に見んか。鳥の高く翔り、樂し氣に囀り、美しく着飾る所以は、一つに其種子存續の目的を全うせんが爲めである。此鳥は鳥肉として、單純な物質的經濟に附する事も出来るが、寧ろ精神的經濟と相俟つて、市場賣買の商品とする事が出来る。此場合鳥其物の永續性は、頗る確實に保護せらるゝ事となる。

獸類に至つては、種子保護の爲め、肉の發達が向上するのみならず、更に知力の發達を見るのである。

故に肉のみの物質經濟に附するよりは、精神經濟をも含めて、之れを市場に價值付けるのである。牛馬の價值は、其肉と肉より來る勞働力のみならず、其外容毛色及び智力の如何が、價值判斷の要素となつて來る。そして此の精神的價值判斷が、牛馬の種子を永續せしむる上に、大なる關係を有するのである。最後に之れを人類に見る時は、肉としての市價は殆んど零であるが、其種子の保護者たる筋肉勞働、智力乃至

靈力に至つては、實に無限の價値がある。今日では、筋肉労働のみが市場價値を有するやうに見えるが、智力靈力何れも賣買價値を有するのである。即ち人間の中に、物質的價値と精神的價値が共存し、何づれも子孫永續の爲めに、其保護者として存するのである。故に人間の經濟は、其子孫永續の保護を全うする事を目的とせねばならぬ。若し此目的を誤り、人肉を賣買するが如きは人類社會の大罪である。其如く此目的以外に智力を賣買し、靈力を賣買するのも人類の大罪人である。然るに果實、魚鳥獸等の一切價値を商品化し、遂に其永續性をも消滅して仕舞ふやうに、私慾的或は自殺的經濟運轉が、暴威を振ふ事により、人間を全然商品化し、其永續性を剝奪して仕舞ふ事がある。斯くの如きものを物質主義經濟と命名する事が出来るなれば、子孫永續の使命を全うせん爲めのものを精神主義經濟と命名する事が出来るやう。而して物質主義經濟の中には、資本主義經濟や共產主義經濟を得べく、精神的經濟には、凡ての宗教主義經濟を含有せしめる事が出来る。宗教主義經濟と言ふ語は、或は私の新造

語かもしれぬが、之れは私の目に、宗教の齎らす、經濟力の決して物質的經濟力に劣らぬものがあるからである。宗教的經濟とは、言ふまでもなく、精神的富を生産する範圍を指すので、多くの宗教は、物質的富から遠ざかるを常とするが故に、宗教は經濟と没交渉であるやうに考へ易いのであるが、實は大いに精神的富を作らんが爲めに、特に物質的富より遠ざかるのである。そして其蓄へ得た精神的富が、如何に社會の物質的經濟生活を助けたかを思ふ時は、その決して架空の議論でない事を知り得るのである。

例へば、日本の維新當時に於て、若しも比叡、高野、身延、或は佛教七宗八宗の諸戒壇に、身を捧げて、献身奉謝の靈的生活を遂げた、幾千百の僧尼が無かつたなれば、そして彼等の作り出した深遠幽玄な、精神的富が無かつたなれば、更に又夫の粗衣粗食に甘んじ、青表紙を叩いて、天下の青年を教育した儒者所産の無形的資力が無かつたなれば、果してあの維新の大業が成就し得たか否かは、疑問である。支那印度

が、今日の悲境にある所以は、必ずしも物質的富の缺乏に困るのではなく、寧ろ精神的富の大缺乏に歸因するのである。但し支那には老莊孔孟の教あり、印度には、バラモン佛教或は回教があつて、決して精神的富なしと言へない、それは寧ろ餘りに宗教的生活に捉はれすぎた、結果ではないかと言ふ説も、強ち不道理とは言へぬ。之れは丁度物質的經濟の跳梁跋扈が、社會の經濟生活を、混亂衰退せしめた様に、あまりに精神一方に偏した結果は、遂に社會を殺す事になつたのである。

西洋に於ても、ロマンカソリックの他界主義宗教は、近代文明を産んだ母であつた事は、明かな事實である。若し僧院の壁の中で、鍊金術を工夫した、獨身克己のモンク生活が無かつたなれば、決して今日の科學文明は産れなかつたのである。宗教改革以後の俗人宗教たるプロテスタントは、ロマンカソリック程、世離れはして居らなかつたが、其極端な禁慾主義は、又少なからず精神的富を作る上に役立つたのである。近世の新興國は悉くこの新教の精神的富の賜物である。

然るにこの精神的富が、餘りに物質化されすぎた爲め、そして其物質力が、餘りに進みすぎた爲めに、基督教主義精神が、萎縮沈滞して仕舞つたのである。

第二十六章 物質主義經濟の批判

物質主義經濟と雖も、單に物質のみを取扱ふと言ふ譯ではない。精神的富をも十二分に利用する事を知つてゐる。たゞ其特色とする所は、凡ての富を物質化せんとする事に存する。

例へば此處に一人の美人がある。

此美人の與ふる肉感的價値は、實は精神的富の最も原型的カネモノなもので、之れを基礎として、戀愛とか、母性愛とか、夫婦愛とか、更に進んで聖愛をも、産出するに至るべきものである。然るに物質的經濟は、直ちに之れを物質化して、千萬金の黄金となし、其遺骸を人慾の蹂躪に任せるのである。

又此處に一人の巨人がある。彼の有する腕力は勞働力として子孫社會の永續に資すべき、神聖なる運轉を齎らす、天與の機關である。然るに物質的經濟は、此腕力を物

質化して、賃金の奴隷となし、或は遊戯の道具として仕舞ふ。一時間の格闘に、數萬金を贏ち得る勇士は、之れを精神的富の評價より見る時は、犬や牛が演技場に相關ふものと少しも違ひはない。彼の永性的價値は、其儘葬り去られるのである。

知力は最も大なる、精神的富の生産機能であるが、其所産、例へば科學の如きものを直ちに物質化して、人間社會の物質生活を豊かにする事は、必ずしも精神的富を掠奪するものではないが、智力的機能が金錢に左右せらるゝ時は、忽ちにして其永遠性を失ふ事となるのである。斯くて社會が、只利をのみ求める學者を産出して、眞の學者即ち永遠の眞理を追求する、精神的富の持主たる學者を失ふのである。まして靈力の世界に於て、其宗教を、金錢の奴隷にする程悲惨な事はないのである。然るに、今日の資本主義經濟社會に於ては、宗教の生命は全く物質的經濟の威力に支配されてゐるので、永遠に屬すべき宗教が、鼻下三寸眼前一尺の間に低迷徘徊するのである。

斯くの如く、肉感的、勞力的、智力的、靈力的價值を悉く黄金化して、之れを資本となし、更により大なる物質化を成さんとするのが、即ち世に言ふ資本主義經濟である。此經濟の下にある産業は、成るべく少き勞力で成るべく多くの収益を得んとするのであるから、勢ひ賃金を最小限度に支拂ふ事を、原理とするのである。然るに此下にある勞働者が精神的富を樂む時、若しくは精神にも、其質にも極めて貧窮な時に於て、資本家は充分に其目的を達し得るのである。然るに勞働者が、精神的富を捨て、物質的富に走り、貧窮の度を越へて、稍々高等の生活を營み得るに至つて、彼等も亦資本主義經濟家たらんと希望を起し、爰に賃金を値上げ、勞働時間短縮の請求を提出し、遂にストライキともなるのである。之れの對抗策として、資本家の方では、機械を使用するが、機械は人間のやうに自由に運轉する事が出来ないので、一度運轉を開始すると、否や應でもその運轉を繼續せねばならぬ。其結果生産過剰を來すのは免れられぬ所である。一旦生産過剰となれば、これを捌く爲めに、海外市場の開拓を要

し、他國との競争を惹起し、遂には戦争をも勃發せしめるやうになる。若し萬一此の吐け口が出来ず、戦争も出来なくなると、爰に經濟界の大バニツクとなるのである。物價低下、失業増加、産業停止、株式暴落、貧窮困憊、亦如何ともする事が出来なくなる。共產主義經濟も、其物質主義である限り、落ち行く先は同じ事である。只其極端な唯物思想は、一層怖るべき結果を招來するに違ひない。此物質主義經濟の行詰りを救濟せんが爲めに、所謂慈善事業なるものが、提出されてゐるが、之れは物質主義經濟家を取つて非常に患はしいものである。けれども亦一種の緩和劑として、資本主義社會に貢献するところが多い。その共產主義なるものは、此慈善事業に對して、甚だ快こゝろよからず、この様な救治は、生産業其ものが、當然支給すべきものとして、勞働者自ら生産機關と其収益を監視せんとするのである。併し生産そのものが停止するに至つては、共產主義も亦施すに途はない。生産停止は直ちに社會全般の生活停止となるのである。

共産主義者が、基督教を以て魔酔劑なりとし、その撲滅に全力を注ぎつゝあるのは、此慈善的温情主義を排して、私慾的經濟の赤裸々な相撲を取らんが爲めである。けれども少數の資本家であらうと、多數の勞働者であらうと、其物質的私慾的相殺的經濟である間は、其落ちゆく結果は同じ事である。此慘憺とした私慾同志打ちの世界を救済すべきものは、只眞正な基督教的經濟であらねばならぬ。

第二十七章 (A) 基督教主義經濟

私は宗教界に身を投じて以來、一家經濟の問題には心を用ひまいと決心した。けれども病身の妹を、親友西村に縁付ける際に、若し妹が發病でもすれば、其手當だけは必ず支給する事を約した。そして極めて健康な彼の妹を、私の妻として迎へた。ところが西村の妻となつてからの妹は、非常に健康で三男一女を出産したが、西村は絶えず財政難に苦んだ。そしてその都度、宗教家たる私が、相當の援助をした。此の援助は、宗教家として受ける給料では、到底出來なかつたので、多くは英語を教へたり、書物を書いたり、特別講演、例へば論語の通俗講話などで臨時收入を得て、それを支給して來た。私の宗教界に對する有形無形の奉仕は、相當多額に達してゐるけれども俸給としては、二十五圓が振出しに最近の百三十五弗が最高である。極めて簡粗な生活で、私一人は少しも不平は無かつたけれども、父母と妻と一人の妹、それに二人の娘

を連れて居るので、多少其生活振りを考へてやらねばならなかつた。

渡米前までは實に無茶苦茶に過して來たのであるが、此の十年程のうちに、漸く家庭經濟が解つて來た。そして家庭問題が、實は宗教問題としても、大變必要な事が明かになつた。特に東西思想の接觸地にある、米國生れの男女を思ふ時、家庭のみが彼等の根據である事を見出し、東洋の家族主義と西洋の個人主義を、適當に調節すべきものは、たゞ家庭にある事を確信するやうになつた。家庭は社會の單位であると同時に、又個人の發育所である。完全な家庭の存在は、健全な個人の發達を助け、又社會の健全な存立永續を助けるものである。従つて家庭經濟は重要な問題であるのに、之れ迄、これを粗略に抛つてゐた事を後悔した。

このやうに、自己の家庭の事に心付き、そして後イエスの宗教乃至經濟思想に考へ及んだ時、此處に又一段の光明を發見した。即ちイエスの宗教が、家庭本位の宗教であり、又イエスは父ヨセフの死後、少くとも十年や十五年は、自ら家庭の經濟を擔任

せられたと言ふ事である。

此光明に照らされて、再び山上の垂訓を読み返した時、その説教が悉く其家庭生活に於ける、實驗から生れたものである事を知つた。その九福の眞理も、鹽や光の比喩も、怒る勿れ、偽る勿れ、惡に敵する勿れ、敵を愛せよと言ふのはすべて家庭道德として最も適切なものである。そしてイエスの神の國の理想は、實に家庭生活の理想を、社會的に延長したものである。

社會主義者は、此の理想を、現代のやうな社會制度の下では、到底行はれぬ空想だと言ふのである。けれどもこれを家庭に見る時には必ずしも高遠すぎる理想ではない。家庭に怒聲なく、一夫一婦の倫正しく、互に猜疑心なく相信し、惡童や我儘娘を寛恕し、趣味意見等の敵味方を凡て愛して、完全な愛を家庭内に養ふのは、その基督教を信ずると否とに關せず、人間が心から求めて止まぬものである。このやうな理想的家庭を營む爲めに、經濟の必要は言ふまでもない事である。そしてイエスも又決して、此

經濟問題を顧ないと言ふ筈はない。否イエス自身、年若い頃から、相當多人數の家庭經濟を荷はされたのであるから、その充分な經驗から、經濟問題を説明されたものと思はれる。そして其最も著しいものはマタイ傳第六章である。

今少し項を分つて、之れを論じて見たい。

(一) 隠れたる施濟 マタイ傳第六章一―五

マタイ傳第六章の一節に同章全篇の緒言として、左の一文がある。

「汝ら見られん爲めに己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ然らずは天にいます汝らの父より報を得じ」

之れは精神的富の獲得原理を言つたもので、物質的富の場合と自ら其趣を異にしてゐる。特に家庭の富は、物質より精神の方が大切である。百萬長者の家庭よりも、貧者の家庭に、より豊かな家庭生活がある。それは即ち精神的富が恵まれてゐるからである。言ひ換へれば、目に見えないものに信賴するのであつて、凡てのものを物質化せ

んとする主義と相反するものである。けれども、その報ひとして得る所の結果は、決して單な觀念的なものではない。十分實質的に計算が出来るもので、必要に應じては、物質化し、又黄金化し得るものである。即ち精神的富は物質的富と同様、經濟的資源たる事に於て、少しも輕重高低の差はないのである。

其第一例として、隠れたる施濟に就いて考へて見る事にしやう。(マタイ傳第六章二―四)

隠れたる施濟を、東洋流の隱徳と見る時は、これに對する陽徳があると言ふ事は、決して誤りではない。けれどもこれを家庭内に見る時に、隠れた無我の愛が家庭其物を建設する實力である事は明白な事である。そしてこの無我の愛に基づいた健全な家庭が、如何に經濟的能力の基礎をなしてゐるかは、又極めて明白な事實である。けれども今日の一大誤解は金錢あつての家庭、經濟の基礎が出来てその後、妻帯せよと言ふ考である。此の考への來る所を見ると、妻子扶養の義務が主なる動機であるが、この物質的扶養の義務觀念は、自然に人に物質的經濟觀念に重きを置くやうにするので、遂に世

に謂ふ、財産結婚となつて家庭愛などは、敢て顧ないと言ふやうになる。この様な家庭を有する社會は、其經濟に於ても大いなる行詰りを招くは當然の事で、男子は妻子扶養のため奴隸生活を餘儀なくさせられ、妻子は又更に、その膏血を搾つて、物質的に贅澤な生活を營むやうになる。世の富豪もこの様な家庭に苦しめられ、貧窮な家庭は尙更苦しめられるのである。

このやうに考へて來ると、家庭はどうしても無我の愛から出發せねばならぬ。換言すれば男女間の眞正な戀愛から出發せねばならぬ。けれども完全無缺な、戀愛は容易に見出し得られるものでないから、此の戀愛の理想を目的として、兎に角相當の男女相約して、家庭生活を初めるのが定規である。そして此の夫婦間の一大目標は、その夫婦愛を完全に養成すると言ふのである。此夫婦愛は他人に見えない隠れた施濟即ち報ひを求めない、無我愛の實行によつて養はるゝものである。夫は妻のために隠れた所に其愛を實行し、妻も同様これを行ひ、右の手の爲した事を左の手に知らさないやうにす

る。これがやがて夫婦愛の美しく養ひ育てられる基である。このやうな夫婦間に、子女が儲けられ、この子女に對する親の愛は、言ふまでもなく無我の愛である。此無我の愛の存する處に、自然の經濟力が生れるのである。即ち夫の爲、妻の爲、或は子女の爲、どんな事でもするといふ奮發心が、如何なる境地からでも、經濟を生み出す力となるのである。今日のやうに社會が何か職業を興へそうなものだなどと、空頼みをして自ら奮發しないでは、如何程好境遇に置かれても、結極行き詰るより他はない。

經濟の本源は外界ではなくて、人間の衷に存在してゐる。換言すると人格が本源である。そして人格の養成所は家庭より他にない。西郷南洲が、子孫の爲めに美田を買はずと言つたのは、其子女の教育に十分に力を注いだ自信があつたからである。細君が田地の好い賣物があるのを聞きつけ、夫に向つて其土地を買ふ事を勧めた時に、大眼玉をむき出して、我等の子供の中に、誰れか一本立ちの出來ない弱蟲があるか、ど怒鳴つたとの事である。家庭に金を貯め、財産を残して、子女の人格を台なしにして

仕舞ふ程馬鹿氣た事はない。貧乏な木小屋から、アブラハムリンカーンが成育したのである。

無我の愛の報ひは人格である。そして人格のみが眞正の經濟の基礎を造るのである。イエスは三十歳まで其家庭經濟を運轉された。其運轉法が、悉く隠れた施濟であつた事は明かである。イエスには非凡な力があつたので十分な必要物を、其家庭に供給したに違ひない。それ等は悉く隠れた施濟であつて、其結果弟妹達が皆立派な人格者となつた。素より歴史的に其證左を擧げる事は出来ぬが、イエスの弟ヤコブが、使徒の一人として、エルサレム教會を支配したと言ふ傳説のあるのを見ても、十分に其消息をける事が出来る。

イエスは、この家庭に於て實驗した、精神的經濟法を延長擴大して社會に普及し、以て神の國を建設せんとしたのであつて決して觀念的空想の結果ではない。

今少し進んで、社會に於ける隠れた施濟に就いて語る時、これは所謂富の分配に外

ならぬのである。

物質的富の分配法には、賃金、報酬配當、賞與乃至慈善的贈與等がある。此の分配法は産業停止、失業増加の場合には殆んど其運轉を停止して仕舞ふ、たゞ残るものは慈善的贈與のみである。けれども慈善的社會事業は、止むを得ない應急手當で、決して健全な社會政策でない事は、既に論じた通りである。バグソン氏が提出した、三ヶ條の救濟策も、教育を高調する點に於て、大いに精神的富の必要を認めたのであるが、大體に於て慈善的である事を免れない。政府と資本家が共同して、慈善事業をなす事は、經濟上から言へば、餘りに收支のかけ離れた仕事である。寧ろ道路改修とか、港灣開拓とか、耕地整理など永久に社會經濟を益するものに、人力と金力を注ぐのが本統である。

社會に於ける、隠れた施濟とは必ずしも慈善事業ではない。宗教家が無代價で、又隠れて其精神的富を一般社會に分配するやうに、經濟價値を、成るべく社會に知れな

いやうに、又直接報酬を求めないで、隠れて一般社會に施す事である。換言すると、事業の永遠化を計るにあるのである。

例へば、此處に一事業家があつて、其事業經營上、何等の利益を得る事が出来ないとしても、之れの永續を目標にして、人にも社會にも知れない努力を捧げ、兎も角も其事業運轉を繼續し、幾人かの人々に職を與へ、其生産物を適當に販賣したとすれば、一文の利益なしとするも、社會に對しては、大なる貢獻を爲した事で、彼は何等慈善家の名を貪る事なく、而も健全な社會生活を建設し得るのである。

ヘンリーフォード氏が、米國產業界に於て、斷然頭角を現はしてゐるわけは、實に彼が天才的能力を、事業經營上に傾注し、慈善家の名を得る事なしに、社會の健全な經濟生活に資するからである。ところが數年前英國にロイドジョージ氏を訪ねた時、米國の農業を如何するか、との質問に對し、フォード氏は何とも答へる事が出来なかつた。之れはフォード式安價自動車のために、社會一般に其利益を分配し得た事は、稱贊に價

するが、その爲めに日に月に荒廢してゆく農村をどうするか、と言ふのが、ロイドジョージ氏の皮肉である。昨今のやうな賭博的農業は、一旦新開地のクリームを使用し盡した曉は、全く無役の荒地となるのである。農園の永遠化、農業を基礎とした國産の永遠化、是れこそは社會經濟の根本問題である。この根本問題さへ解決すれば、富の分配は容易である。如何に儲かる事業でも、それは一時的のもので、何等の社會的價値を持つてゐない。その一時的収益で貯へた金を慈善的に吐き出しても何等の効果はなく、忽ち枯渴して仕舞ふのである。ましてその蓄積された剩餘金の如きも、多くは株券のやうなものに變化され、其株券が一文の價值のない場合、運轉が止つた大工場や其機械類を、どうする事も出来ないから、社會は當然破産する外はないのである。そして、このやうに永遠化に貢獻し得る事業家を如何にして作るか、これは精神的富を以て徐ろに養成するより外はない。このやうな人物は、精神的生活を、宗教家と少しも變りない。今後の世界の要求するものは、實に此種の精神的經濟家である。

第二十七章 (B) 祈禱と經濟 (マタイ傳六章五—十五)

祈禱は宗教生活の呼吸とも言ふべきものであるが、其經濟生活に及ぼす力は又實に偉大なものである。バブソン氏も祈禱獎勵家の一人であるが、米國の社會に祈禱の力が段々衰へつゝあるのは、實に遺憾とする所である。偶々祈禱を高調するものがあるかと思へば、それは所謂加持祈禱に類するもので、たゞ聲の限り絶叫して天よりの加護冥福を強奪せんとするの類である。眞の祈禱は「主の祈」として示された。

「天にまします我等の父よ、願はくは御名の崇められん事を。御國の來らんことを。御意の天のごとく、地にも行はれん事を。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我等に負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。我等を試に遇せず惡より救ひ出したまへ」

とある。この精神を體得せねばならぬ。先づ神の御意が天に在る如く、此地上にも成就せん事を求むるのであるが、此祈禱中には單に神に向つて懇願するに止まらずして、如何なるものが神の御意であるかを、伺ふと言ふ態度が含まれてゐる。この神意を伺ふと言ふ態度は、單に耳を聳て、天來の啓示を聴くと言ふのみならず、天意と相俟つて、我衷に造り出さるゝ新天地をも含めてゐる。即ち神人協力の創造が働くのである。此創造の天地こそは、活ける實社會を導くもので、社會の行詰りに際してこれを打破し新生面を開くべき鍵である。一方から言へば、世の中は絶えず破壊されつゝあるのである。故に相當堅實な社會と雖も、思ひ設けぬ事變の爲め、全く破壊され、或は行き詰りを來たすのである。こんな時、人を求めても、天を恨んでも如何ともする事が出來ないのである。宜しく祈禱三昧に溶け込み、この窮地から新しく開發されるべき神の御意を求むべきである。此求める心に湧き出づる新創造の天地こそは、新しい富の世界で、過去の窮境を救ひ得て尙餘りあるのである。

世には、私慾を富の最大動力とし、若し人間から私慾を取り去れば、活氣のない、死

屍のやうな社會になるであらう、と論ずる人もあるが、私利私慾は人間活動の動機として、相當強いには違ひないが、利己主義は決して最大の動機ではない。如何に私慾に汲々としてゐる人でも、其表面は公共の爲、誰れかの爲と言ふやうな遁辭の下に、隠れる事を努めるのである。これによつても、無我の動機が、一層強大な動機である事を知り得るのである。けれども自我の擴大延長は、人として自然に要求するもので、之れを制止する要はない。此自我擴大延長の一方便として、私慾的所有願望が勢を逞ふするのであるが、自我其物の内から、創造的活動力が生れて來れば、その衝動力は決して私慾私心の衝動力に劣らない。否寧ろ、より強く、より遠く、より永いものがある。

イエスの家庭に於ても、家政上の行詰りが無かつたとは言へない。カナの婚姻の折、酒が盡きたので、母マリヤが直ぐにイエスに訴へたところを見れば、イエスは平生このやうな場合に處する途を能く知つてゐられたに違ひない。奇蹟と創造とは、單

に名稱の相違で、創造は奇蹟と見らるべき事實の別名である。科學的發明も、祈禱と同じ態度の心的作業の結果に外ならぬ。祈禱のない社會には、新發見は非常に少く、その宿命的消極主義の社會では、到底退嬰的癡類の運命を免かれる事は出來ない。

イエスは科學者ではなかつた。けれども生得の盲目者を視て、これ此人の罪にはあらず、又兩親の罪にもあらず、之れによつて神の榮光の現れん爲なりと言つて、直ちにその目を癒し給ふた態度は、たしかに發明家の態度である。科學者は忍耐強い研究に依つて、新發見を得、イエスは直感と天啓に依つて、之れを成し給ふたのである。そして科學的研究者も、その發見の際の大なる力は、寧ろ、直感乃至天啓に依る事は、イエスに於けると略同じである。

イエスには、如何なる境地に於ても絶望が無かつた。綽々として餘裕あり、多々益々辯ずるの大天地が存在して居つた。この天地は合理的天地であると同時に、創造的天地であつた。人間がその必要に應じて開拓すれば、どれ丈でも無窮に開拓が出来る

天地で、行詰りが無い。行詰りとは、限りある人智で自ら局限するものである。五感のみに依つて知り得る天地は、極めて極限された天地である。五感の達し得ない大千世界は、たゞ信仰を以て達すべきである。信仰でこの大千世界に生活するものは、最早五感の世界に局限される事はない。如何なる所にも自由がある。そして五感の世界の行詰りを打破してゆく、そして必ず自在の道を發見するのである。

イエスが「我父の家には住居多し、」と叫び、「我來りしは汝をして、生を得しめ且つ豊かならしめん、」と言ひ給ふたのは、此大千世界からの叫びである。イエスは直感と天啓で、此大千世界の實在を保證し、科學者はこの保證の下に、孜々として此大千世界を開拓しつゝあるのである。

マルサスの人口論は、科學的論證であると言はれてゐるが、其實は宿命的局限世界の議論である。大千世界の實在を信ずれば、彼のやうな消極的結論を以て、人間を嚇かす必要はない。今日の科學的能力を應用すれば、テキサス一州のみでも、尙能く世

界の人口を養ふだけの食料を生産し得ると言ひ、又茫漠とした沙漠も、水さへ注げば、忽ち化して豊肥な土地となり得るのである。そして沙漠に水を導くやうな事は、決して不可能な事でない。問題は、大千世界にある財源の有無に關するのでなく、人間の内部に之れを取り出す能力の有無にあるのである。そしてこの能力は、信じて求むる所に動いて來る。換言すれば、祈禱の有無に依るのである。祈れども與へられずと放言するのは、如何にその薄信者であるかを證明するものである。

斷食の收益 (マタイ傳第六章十六―十八)

斷食は決して難業苦行の爲ではない。頭に油を塗り、顔を洗へとあるやうに、斷食の歡びを保つべきを教へられた。此歡びは、斷食によつて獲得する、精神的收益に基くものに外ならぬ。此收益は、我内部を豊かにするものであつて、一週間や二週間の斷食は少しも怖れるやうなものでない。

エヂソン氏は、數十時間断食黙想を凝らし、其頭腦に發明機械の全型を鑄造して、其後にこれを實際化すと言ふ事である。

凡そ精神的收獲を得る爲には、一時的に物質界の規範を離脱する必要がある。これが即ち古來宗教家が多く断食を行ひ、又獨自隱遁などを選んだ所以である。難業苦行の報酬として、物質的利益を求めんとするやうなものは、未だ精神的收益の何物なるかを知らぬものである。

曾て、某米人教會で、大いに断食の必要を説いたところ、米人はフイスタングは流るがフアスタングは行はぬと言つた。之れこそ、バブソン氏の所謂精神的富の缺乏を招いた所以で、麻を着、灰を被り、断食して、大に精神的蓄積に努力せねばならぬ事を教へるものである。

イエスは、パリサイ的形式主義の断食を排し給ふた。そして「汝等花婿を取去らるる事あらん、その時に断食すべきなり」と教へられた。即ち断食は必要に際して行ふ

べきもので、少しも儀禮的になすべきものではない。そしてその有意義な事は、前の祈禱と少しも變りはない。イエスは弟子等の癒す事が出来なかつた病者に就いて、それ等に對しては祈禱と断食に依るのでないと癒す事は出来ぬと宣言し給ふた。これによりてもその重要な意義を知るべきである。

天に貯へらるゝ富 (マタイ傳六章十九—二十一)

經濟の資源を單に物質界にばかり求める時は、必ず行詰りとなる。先づ第一に無限の資源を有する、精神的の富を蓄積せねばならぬ。之れは前の隠れたる施濟、隠れたる祈禱、隠れたる断食などに因つて成さるゝもので、一言で言へば、宗教が盛にならねばならぬと云ふ事である。けれども宗教が盛になると言ふ事は、必ずしも塔堂、伽藍が天に聳え、善男善女の會衆が雲のやうに集り、献金が山をなすと言ふ事を意味してはゐない。物質化せられた近代の宗教が、全然行詰つてゐるのは、凡ての宗教的

行事を、物質的評價に依つて判定した爲である。

宗教の本務は、見えざる蓄積をなす事である。大伽藍の代りに人格を作る事である。千百の會衆を目指すよりも、一人半個の靈魂を目指すのである。富者の萬燈よりも貧者の一燈に無形の價值を認識するのである。このやうな宗教は、身に一物を有せず、家に一片の食を餘さずと雖も、尙ほ富者たるを失はぬ。ポーロの「我貧しきに似たれども、多くの人を富まし、何も持たざるに似たれども、總てのものを持てり、(コリント後書十六章十)」と言ひ得るところである。

昨今、基督教の觀念的救済に就いて、其餘りに空虚な事を訴へる者がある。そして他面には、此觀念的救済を捨て、實質的救済、即ち物質萬能主義に陥らんとするものがある。けれども、眞理は兩者の中間にある。初代教會に於て、肉となつたイエス、キリストを強く主張したのは、兎角觀念主義に陥り易い宗教を、實質的現實世界に結びつけんが爲に外ならぬ。そして基督教の本色は、此物心兩界を統一融和せしめ

る所にあるのである。

神とは、物心兩界の創造者を指すのであるが、兎角觀念的によりて、空虚な對象物視せらる、弊がある。之れに反して、萬有神教は、餘りに神を具象化しすぎて、結局神無しと言ふ理論に到着する。けれども眞理は、兩者融合の妙趣にあつて、説明は非常に難しいものである。けれどもこれは、前に法華經と羅馬書の比較研究で、論じたやうに、三一の教理に於て、其窮極的解決を與へられたもので、肉となつたイエス、キリストを信ずる所に、この兩界の融合一致が、實證確立せらるゝのである。このイエス、キリストを信ずる宗教に於て、初めて精神的富と物質的富とが交觀融通せらるゝのである。故に眞正の精神生活と、經濟生活とは、イエス、キリストにより、天地萬物る主たる唯一人の點の神を信ずる事に依つて成就せらるゝのである。

神中心の生活 (マタイ傳第六章二十二―三十四)

第二十七章 (B) 祈禱と經濟

曾て、岡山から東京へ、何等就職の目的なしに出掛けた時、鎌倉の夏期學校で、マタイ傳六章二十二より三十四を題して、絶對的神中心の生活を主張し、經濟上の苦勞心配より脱離すべき事を述べた折、一友人は英雄に非らざる限りその様な信仰は持てぬ」と語つた。私はこれを聞き甚だ遺憾に思つたが、英雄ならずとも信じさへすれば、必ず成し得る事は明かである。私は岡山に於ける聖書傳道以來、須磨の療養を経て、實驗上確かにその偽りでない事を信じ、又東京滯在中に於て、岡山縣巡回傳道に於て、更に又覺醒運動に於て其事實を證明されたのである。太平洋沿岸に於ても、教會經營、社會事業經營、或は數回の巡回運動に於て、此主義に立脚して今日迄經濟運動を行つて來たのである。そして今後も更に一層力を注いで、基督教主義經濟を主張せんとするわけは、此處に實驗を有するからである。

従來は、兎角觀念的神を一方に据へ、之れに仕へんとして、他面實質的黃金を崇拜したのである。これが宗教の行詰りを招いたと同時に、經濟の行詰りを生んだわけ

で、これを救ふ道は、物心兩界の主なる、神をのみ拜すべきである。すれば、精神的にも、物質的にも、必要物は必ず與へられる、と言ふのがイエスの經濟觀である。此信仰は決して無理な信仰ではない。これこそは我等が日常生活の内に持つ無意識的信念に外ならないのである。

例へば、米、麥の耕作に従つてゐる者は、その收穫さへあれば、魚、衣類の給與を疑はずにゐる。又車を曳き、機を織る者は、自ら胃を満し、生を養ふ實質的の物を收獲しないでも、其職を忠實に行へば、必ず必要な食料品は供給せらるゝものと信じてゐる。其他俸給生活をしてゐる者など、凡て悉く此信念の下に働いてゐるのである。

是れ等の人々の持つ信念こそ、その裏には、精神的富と物質的富の交換融通の原理が、嚴然として存在してゐる。人間の肉感的、體力的、智力的、靈力的生産物は、その有形的と無形的たるを論せず、互に交換若しくは融通さるべき約束を持てゐる。此約束は天則であり、又神の恵である。

米一升で、魚一尾と交換出来るといふ事は、何といふ不思議な事であらう。これは需要供給の原理に支配されるもので、必ずしも不思議はない。若し米を作る人が、一升の米で魚一尾が交換出来るから、米百升を作つて、百尾の魚を得んとし、更に百尾の魚は、何圓の黄金に代るが故に、米百升を以て黄金何圓を得んとし、更に之れを幾層倍して、何百何十圓の黄金を得んとする時は、忽ち需要供給の範圍を脱出して、破産窮迫に陥る外はない。これが所謂經濟界の恐慌である。若し人間社會の經濟が、需要供給の按配をさへ誤らなかつたならば、決して恐慌の來る筈はない。

すれば、需要の按配を如何にして整理すべきか、と言ふ問題であるが、これは甚だ困難な事業である。けれども、人間一人々々の需要と供給は、その大體を測定するに困難はないから、その總合である社會全體の需要と供給を割り出す事が出来ない筈はない。たゞ困難の最大原因は、人間の私慾である。此私慾心の跋扈が千差萬別の綾をなしてこの簡單なるべき經濟界を攪亂するのである。そしてこの攪亂を助長する、大なる誘惑物は、黄金である。

黄金は、物と物との交換媒介物に外ならぬ。これさへあれば、何物をも手に入れ得るので、黄金のみを手に入れる事を考へ、黄金を收得し得る事物は、何事に係らず、これに従事せんと競ふやうになるのである。之れが一面には産業富國の繁榮を來らす基ともなり、自由競走を以て、富を作る動力とも考へられたのであるが、其結果儲る事業のみが繁榮を極め、儲らないで而も人生社會の必要なものは、閑却される事となる。其結果、需要せられないやうになつた生産物の過剰、そして他方に必要物の拂底となる。これ實に社會的貧窮である。貧窮を子澤山に歸する事は、愚論の極である。若し人間が天産物のみで生活すると言ふなれば、限りある天産物を、限りなく増加する人間で消費する時は、遂に天産物も盡きるに至るかも知れないが、人間各自が、その人格を通して生産するものを(勿論大自然の資源は用ふるにしても)互に交換融通するに決して、用ひ盡さるゝ道理はない。何故なれば、人格的資源は無限であり、その

人格が使用する大千世界は、又無限であるからである。

此經濟の本源たる人格を度外視して、黄金にのみ心を奪はれたのが、大間違ひの基である。人間の勞力の代りに機械を用ひ、社會人類に、成る可く低賃金を支拂ひ、有り餘る物貨を夥しく生産して、なけ無しの社會を搾取せんとするのは無理である。所謂、サチュレーションポイントに達して、大工場の休止、社會のパニックとなる外はなし。

人間程、自由自在に、如何やうにも運轉し得る完全な機械はない。この人間の運轉をさへ適當に出来れば、需要供給の道は自然に整ふ。人間は人間に必要なものを生産する能力を持つてゐる。そしてこれは如何様にも變化が出来る。故に完全な經濟の爲には、完全な自由人を作らねばならぬ。機械に奴隷とされた機械人や、一專問にのみ偏極した奇型人は、經濟上貧窮の大原因である。

天下の大學者でも、或る場合、例へば大地震とか、大暴風雨などの場合には、一十

工となりさへすれば生活に困難はない筈である。然るに、大學者とあるものが頑張るから、貧窮が迫つて來るのである。人間には、人間のやる程の事は、大抵之れを行ひ得る能力がある。之れを基礎として、互に交換融通を行へば、人間の數が多ければ多い程、其社會に自由な經濟的運轉を爲し得るのである。人口は減少し、消費者を搾り殺し、獨りで天下の經濟を左右しても、ロビンソンクルーソー程の妙味もないではないか。

勿論私と雖も、人間の粗製濫造を獎勵するものではない、神の像に似せて作られた、神の子たる自由人を作るには、男女共に大に修養するところがあらねばならぬ。そして理想的な子女が幾人か恵まれて、一家團樂の樂園を作り得たとすれば、それが一物も無い沙漠の中に在つても、尙生活を開くべき道を與へられる。況んや、今日の文明時代に於てをやである。

昨今の不況時代に於て、社會に厄介になるものゝ多數は、獨身者である。家族生活

をなすものは、貧窮の状態に、或は甚だしい程度にあるかも知れぬが、どうにかして互に補ひ合ふ事が出来るので、パブリックチャーチにあるものは比較的少ない。これは、家庭生活其物が、経済力の大きな源である事を、證明するものである。

故に、健全な経済生活を営むべき第一條件は、神の國と其正義を求むる事に外ならぬ。即ち、家庭的相互扶助に基き、最善なる供給を、社會人類の眞實な需用に應じて、生産する事である。黄金を多く儲けると言ふのは、決して眞正の経済の目的ではなす。

第二十八章 家庭の産業化

トルストイ翁の日記に

「私は獨りで階下に寝やう」

明日は五月五日 九十六年

とか

ヤスヤナ、ポリヤーナ

「戀をするのは善い事か、悪い事かと言ふ議論がある。私はこれを明瞭に解してゐる。若し人間が、人間的な靈的生活をしてゐるならば、戀と愛と結婚とは人間に取つて墮落となる。」

或は

「私に付き纏ふ悪魔は、まだ矢張私に附いてゐて、私を苦しめてゐる。」

九十六年、十一月二十三日モスクワにて、
又或所には、

「殆んど、どの夫婦も皆、御互に其行爲を責め合つてゐる。彼等は自分を罪人と思はないのである。けれども一方が責める事を止めなければ、他方は決して潔白な身になれない。」

など書き附けてゐる。

ト翁は晩年家出をして、田舎家の一室でその最後を遂げた。

身は貴族の家に生れ、世界的文豪の名を恣にしたが、その細君には、根限り困らせられたらしい。ある日記には、夫婦間のイザコザは今日限り、全く取り消されたと思つて、無上に喜んだが、翌朝はもうすつかり裏切られ、元の虚空に變つて仕舞ふと書いてある。翁の弟子達に言はせると、翁は遠くの昔に、家出をしてゐた筈である。けれども伯爵夫人は、決して翁を愛してゐない譯ではなかつた。翁の家出を聞くや、失

望の結果、裏の湖水に身投をした位である。すれば何故それ程に翁を苦しめたのであるか、それは女の生命である戀を蹂躪されたからである。翁の理想主義が其家庭を犠牲にしたからである。

是れ迄の理想主義は、餘りに家庭を無視し、戀愛を蹂躪し過ぎた。私なども、天下國家の爲、其妻子を犠牲にした憂國の志士に學び、家庭は社會救済のための一方便のやうに考へて、妻帯問題をも、極めて簡單に取扱つた。一生涯五十圓の月給で充分だと考へた事があるが、それは全く妻子を眼中に置かなかつた計算の結果であつた。まして戀愛などは、男子の口に懸くべき問題でないと、高く止つてゐた。けれども事實は、遠慮なく眼前に迫つて來た。

謠曲紅葉狩に

「ふしぎや今迄有つる女く、取々化生の姿を顯はし、あるひは巖に火焰を散し、または虚空にはのほを降らし、威陽宮の煙の中に、七尺の屏風の上になほ餘りて、其

たき一丈の鬼神の角はかほく眼は日月、面をむくべきやうになさ」と言へるやうな事實が、時々發展されて来る。講壇上で堂々と、理想を高唱してゐる偉丈夫が、家庭に歸つては、半文の價なき悲哀を、その實生活に見せられる事がある。何々富豪と言はるゝ人も、この邊の事では全く赤坊と同様で、遂にトルストイと運命を同じうするものも、決して少くない。

私は、フロイド氏のサイユアナリシスに學び、又動植物の生活に鑑みて、幸ひ男女の生殖素、即ち愛素が、人間の諸現象の基本であると言ふ結論に達した。今はこの議論を詳説しないが、此愛素の蓄積保護が、愛の養育に缺くべからざる資源であると同時に、遊戯の資源、智力、靈力の資源たるを知り、其決して輕率に取扱ふべきものではない事を、知る事が出来た。愛素の亂費誤用は、愛の混亂と缺乏を招くのみならず、經濟力の混亂と缺乏を來すものである。故に一夫一婦の制度に従つて、同棲生活を樂しむと同時に、フランシスとクラ、ダンテとビアトリスのやうな、精神的戀愛を樂し

む方面が無くてはならぬ。東洋の教に夫婦別ありとするのは、或はこの消息に觸れたものかも知れぬ。西洋でも近來は、ダブルベットよりも、シングルベットを用ふるやうになつた。單なる攝生の上からばかりでなく、精神的戀愛の涵養上からも、必要である。元來生殖素は子孫繁榮をのみ目的としては居らぬ。夫婦が一身一體となる爲に、靈肉の交換をなすための素因である。故に直接血液上の變化により、夫婦同性質に一體化せられ、所謂ホモセニ一の現象が、俗に言ふ、「似たもの夫婦」となるのみならず、此蓄積された素因によつて、大いに肉感的能力を増進して、文藝遊戯、演武の發達となり、體力的能力を加へて、勞働と産業の勃興を促し、智力的刺戟となり、科學的發見、發明の世界を造るのであつて、人間の最高の能力である靈性の發達も、又實に此素因に據つて動かされ、こゝに最高宗教の成立を見るやうになるのである。

故に家庭の倫理化は、すべて家庭の經濟化を意味するものとなるのである。完全な家庭は、完全な經濟機關である。勿論家庭の産出する富は、概して精神的富である

が、此富は當然物質的富に變化され得るものである。現に獨身の時よりか、家庭を営み初めてから、經濟上の安定を得たと言ふ、實驗談が少くない。社會的信用を得ると言ふのも、確かに經濟的資源である。普通夫は外に出で、一家の収入を計り、妻は家にあつてその収入を消費するものと考へられてゐるが、此消費の中には、夫の活動力を強め、子女の將來を支配する、積極的能力が潜んでゐる。故に妻は、夫の持ち歸つた物質的富を、家庭に於て、精神的富に變化せしめつゝあるもので、そしてこの精神的富が、外に出でて又物質的富と變化するのである。故に妻は家に在りて、積極的に精神上の富を作るのである、夫は外に出で、それを消費するものであるとも言へる。この両者が完全に相扶けて、初めて眞正の經濟生活が行はれるのである。

ところが或る家庭に於ては、夫は其收入を以て、妻の愛若しくは貞操をさへも蹂躪し、丁度妓樓又は強姦的野獸の檻たらしむるものがある。このやうな家庭には、眞正の娛樂的富を産出せず、體力も衰へ、智力も亂れ、靈力の如きは、全然其影を隠し、た

ゞ猜疑と憎惡と争鬭と批難と貧困と自滅があるばかりである。家庭の經濟化に就いて、第一に注意すべきは、物質化された金錢の取扱ひ方法である。

兎に角、金錢の所有者に、権利が附隨するやうに見えるために、誰れがその金錢を所有するかゞ問題である。漁夫は其職業上、金錢を所有せず、多くはその妻女にこれを托するが、こんな事が細君の横暴を募らせる機會となる。家庭に於て、亭主が關白の位を占むるのは、財布の口を握つてゐるからである。そして此一事が、家庭の圓滿を破る大なる原因となるのである。これの緩和の途は、たゞ精神的富の價値を認識して、それに應ずる金額を分配する事である。けれども今日のやうな勞働本位の賃金制度の下では、精神的富の評價は甚だ困難である。のみならず折角精神的富其物に依つて、潤されてゐる家庭生活を金錢問題で、水臭くするのも忍び難い事である。故に最善の方法は、その収入を家庭全體の収入と見做し、成る可く個人的支出を避け、共同的支出

に重きを置くやうにする事である。そしてその結果は、個人的には極めて簡粗な生活を営み、家庭的には相當文化を楽しむ事となり得る。即ち男女老弱の衣類調度等に重きを置かず、家屋の衛生裝飾、音楽美術、讀書靜養等に對する共同的設備をなす事である。

若し以上の諸設備が出来た上、更に餘裕が出来た場合は、これを以て、家族全體が社會に奉仕する新機會とする事が出来る。之れは家庭産業化の第二步である。

日本に於ては國產獎勵の結果、大に副産業獎勵に努めてゐるやうであるが、家庭は單に夫婦親子の安靜休息の樂園であるばかりでなく、進んで學校とも工場ともなり得る必要がある。何故なら家庭は社會の縮圖であるからである。

勿論工場でも、其多分は精神的富の生産工場であるが、時には物質的富をも生産する工場の一部とも爲す事が出来るのである。之れは過去の家庭工業時代に逆轉するかのやうに見えるが、決してさうではない。今日のやうな自動車、電氣飛行機の時代と

なつては、必ずしも一ヶ所に密集した産業でなくても、分業の原理を應用して、家庭的分業の組織を編み出す事が出来ない譯ではない。特に農業的家庭に於ては、容易な事である。都會の商業に於ても、今や郊外居住が盛になつたのであるから、家庭内の餘裕を、副産業的に使用する事は、難事でない。たゞ一人の稼人に、一家の全収入を依頼して、他の者は、よし精神的富を産出するとしても、之れを物質化する道を持たないで、其儘過ぎ行く時は、稼人の突然な死去、負傷などの不時の出来事は、忽ち一家の不運を招く事となる。故に常にこの副産業的方法を案出する必要がある。そして之れは、更に社會全體としての設備に關係する所が多いから、次の項に於て論ずる事としやう。

第二十九章 將來の社會的大産業

日本の生絲は、世界的大産業の一つであつて、このやうな大産業が、如何にして我國に生れたかと言ふと、これは、日本農家の副業である養蠶に基礎を持つてゐる。この養蠶業は、過去二千年の發達に據る、我民族の特種技能であつて、このやうに副業として、民族一般に普及してゐるものは、他に餘り類例を見ないところである。故に今後大量生産的の競争者が出るかも知れないが、産業的基礎の確實な點に於て、容易に他の一時的生産に壓倒せられる事は無からうと思はれる。殊に昨今絹織物を用ひて、男子の洋服類をも作製せんとする、新傾向が出來つゝあるのであるから、生絲業の前途は、決して悲觀すべきものではない。日本は今後大に研究の歩を進めて、此民族的基礎を有する大産業を保護すべきであらうと思ふ。けれども一時的の好況に煽られ其副業的性質を忘れて、徒らに專業的養蠶流行に捉はるゝ時は、其不況に際し、大

破産の憂き目を免かれぬから、平時より大に注意して、民族の生活を侵害しないやう、警戒を怠つてはならぬ。

日本では米の生産は、食料品として本業に屬するものであるが、是れさへも、其食用品としての性質を離れて、純然たる商品に變化せしむる時は、多量生産は非常な財政上の破綻を來す事になる。この危険を防止するにはたゞ米の食料品たる性質を忘れない事である。勿論剩餘米を賣り出す事は、決して不都合ではないが、一時の利得を目的として一切の米を、黄金に代へるやうな事があれば、それこそ生命に關る大事となる譯である。私は生絲や米の商ひ關係に就いては、全くの素人であるので敢て餘り多く語らうとは思はないが、家庭生活を基礎として、將來の産業發達を考へる時、本業と副業の區別を明かにしておく必要を痛感するのである。

資本主義の社會にあつては、此二つを混同する爲めに、甚しく生活の不安を醸しつゝある。例へば自家生活の本業の雜貨商は、先づ以て其生活を安定ならしむる事を目

的としてゐる。ところが、何か利益の多かつた場合、此雜貨商が一躍して大商店となる事がある。そして一家の生活までも富豪の生活のやうに變化する。このやうに生活までが商品化せられ又一度不況に際しては、忽ち一家生活の安定までが脅かされるのである。其種の混同が、遂に今日の資本家と労働者の對峙となつたのである。若し一定の本業を以て、一定の家庭生活を維持する事を忘れず、其れ以上の利得収益は、之れを社會的共同事業の資とすれば、事業興廢に依つて、必ずしも家庭生活の安定を破られるやうな事はない。勿論一家の本業として選んだ職が、完全に其生計を維持し得ると言ふ事は、出来ない場合もある。其結果轉業する事も已むを得ないがたゞ利益のみを追つて次々と轉業すると言ふやうな事は、決して其生活を安定ならしむる所以でない。何處までも天職を以て立つ事が必要である。そしてその興廢利損に係らず、生活の常規を守る事に専念すべきである。其點に於て世界人類の生活程度を、成る可く平等均一にする事が必要である。そして需要供給の途をも、適當に按配し得る基礎を

定むべきである。

勿論このやうな理想が、容易に行はれようとは思はぬが、昨今のやうな行詰りの機會に、この理想に向つて一步を進める事は、必ずしも不可能ではない。こうして凡ての大産業が、社會的公共事業の性質を帯びる時、人類の文化は隆々として、發展向上するに至るであらう。

私は太平洋沿岸同胞の實際問題に直面して、端なくも、斯く長い經濟問題を述べて來たのであるが、實は同胞の剩餘資金の處置と、二世の職業問題が、當面の懸案であつた。其懸案を解決するに當り、生活安定の本業と、社會公共の大産業とを區別して考へる時は、餘り困難なしに、解決し得るのではないかと思ふのである。

即ち二世は、一世の既に獲得してゐる、生活安定の職業を以て、其本業となす事は困難ではない。そして、後、其剩餘資金を集めて共同事業に歩を進める事が出来る。そして銀行を興すなり、日本人特有の産業を起すなり、これを個人の生活から斷

り離して、共同の目的に向つて經營する時、初めて確固とした基礎の上に、將來の光明を仰ぐ事が出来る。

布哇に於ては、既にホームスラッドの組織に従ひ、第二世市民の生活に安定を與へ、之れを基礎として、布哇全島の三大産業を發達せしめんとする計畫があるとの事である。米國西海岸の同胞の大多數は農民である。第二世は市民権を有するので、土地所有も容易である。先づ生活の安定を第一として、その後副業的に共同事業に手を伸す時は、其興廢のためにはあまり生活を左右されないから、平靜な發展を計る事も出来る。そして此種の事業は、アメリカの社會にも利益を分配するものである以上、決して排日の種となるやうな事はない。

元來沿岸の排日は、單に沿岸の同胞のみが、責任を負ふべき筋のものではない。日本民族として、世界の裏に蒙りつゝある一大事相である。猶太人が其利己的態度により、世界至る所で排斥せらるゝが如く、日本民族も一種特有な民族性に歸因して、至

る所に排斥を受けつゝあるのである。

一小國を以て、僅々半世紀ならずして、世界の三大強國とまで發展したと云ふ事實に基くもので、何故このやうに發展したかと言ふ、理由を知る者には何等の不思議もなく、又怖るゝところもないが、日本帝國の地理的位置すら知らない人々にとつては、不思議と言ふよりも、寧ろ恐怖を以つて、之れを觀るのは當然な事である。即ち侵略的武斷國として、排斥するのである。特に經濟的侵略に於て、一層大なる脅威を感ずるのである。この際日本人が、公明正大な經濟的主義に立脚し、健全安泰な生活を以て、其居住する社會一般に奉仕貢獻する事が出来るなれば、必ず世界到る所に於て歓迎せらるゝやうになり、決して排斥を受けるやうな事は無くなるであらうと言ふ事を信じて疑はないのである。

第三十章 東西文明と人種問題

紐育で、エルウォース、ハンチントン教授の「氣候と文明」を書店で探した時、「文明」をシヴィライゼーションと發音してシヴィライゼーションと訂正された。それで次の書店ではシヴィライゼーションと言ふと、シヴィライゼーションと訂正された。同じ紐育の書店でこれ位の違ひがある。發音の相違なればまだしも、之れが思想の内容になると其相離るゝ事、或は千里の差のある事は免れられない。けれどもこのやうな皮相的相違點を離れて、眞實に近いものを選んで、互に接近する時は、東西文明も自然に融和し黑白黄赤の人種も、共に親善を保ち得ない道理はない。

ハンチントン教授の「氣候と文明」はアムホルスト農業校教授であつた板野博士の推薦で各地の書店を探した結果、漸く紐育の一書店で手に入れたもので、私の思想に大なる光明を與へた。元來私は世界文明を區分するのに、東洋西洋と言ふ風に、經度に

従ふ區分法を甚だ不合理な事と考へてゐた。一體何處からが東洋であり、又西洋であるか。小亞細亞を近東と言ひ、日本支那を極東と稱へるが、西洋文明の尖端西部アメリカ沿岸と、極東とは太平洋を挟んで相接近してゐる。日本から言へばアメリカは東洋であり、アメリカからは日本は西洋である。文明の趨勢が一方は西漸し、他方は東漸したと言ふが、西洋文明の中心である基督教は、東洋に發して西漸してゐる。故に西洋文明の中には、其最大要素として東洋文明が、二千年以來渾沌として存立してゐる。そして、ギリシャ、ローマ、スペイン等の文明が東漸した形跡も顯著である。何處に純東洋の文明があるか。東洋西洋の名に迷ひ、徒らに之れの區別を立て、相争はんとするのは道理のない事である。

地球上の動植物の分布及海潮氣流等の現象が、悉く緯度に従ひ、氣候の關係に依つて動いてゐる。熱帶溫帶寒帶は、極めて明白で、人類分布の趨勢も、其文明の發達も、自づから其氣候の變化に支配さるゝのは、當然の事である。

私は兼ねてより此説を持つて居つて、日本が僅々半世紀で、英米と肩を並べるやうになつたのは、其氣候の相近いもの、ある事を、第一の理由と考へたのである。そして此説を裏書するものとして、ハンチントン教授の著書を手にする事の出来たのを、非常に満足に思つた。

私は同教授の權威の下に、左の様な人種移動期を定めて見た。

第一期 北方より南下して熱帯地方に定住したもの。

第二期 北方より南下して温帯に定住したもの。

第三期 現今北方にありて南下せんとしつゝあるもの。

此人種移動に基いて、文明發達の順序を定むる時は、次のやうになる。

第一期 熱帯文明

第二期 温帯文明

第三期 寒帯文明

勿論これは非常に大ざつばな區分ではあるが、一先づ此大綱に従つて各國の文明を排列して見ると

熱帯文明——埃及、バビロン、アッシリヤ、アラビヤ、印度、南部支那及中央アメリカ

これを總稱して、古代文明と言ふ事にする。

温帯文明——中央歐羅巴、北アメリカ、北部支那、日本

これを總稱して、現代文明と言ふ。次に、

寒帯文明——ロシア

これは未來文明とでも言ひ得るであらうと思ふ。

このやうに區分して見ると、近代文明は悉く古代文明の後を享けたもので、其文明の種子は皆古代文明の中に發見せらるゝのである。日本の文明を輸入文明と稱し、歐羅巴の文明を、獨創的文明と稱へるが、是等は決して當を得て居らぬ。歐羅巴近世文

明の種は、悉くアラビヤ、エジプト、バビロン、アッシリヤの古代文明から來たものに外ならぬ。日本が印度、支那から、其古代文明を輸入したのと少しも變りはない。若し獨創力の事に就いて言へば、其形式は違つてゐるが、獨創的能力の發揮點に於ては、相似たものがある。即ち日本に於ける、宗教的獨創乃至美術的獨創は、その進歩の程度に於て、決して西洋の物質的獨創に劣つてゐるものでない。たゞ科學的思想及び其應用が少し遅れたのである。これは日本政府の鎖國主義の結果で、同じ溫度の地帯に住んでゐる日本人は、一旦西洋文明が輸入せらるゝや、直ちにこれを消化して今日の文明國を作つたのである。之れは其能力に於て同じ緯度の人類であると言ふ特權に依るもので、何も日本人が特別不思議な能力を持つ人種である爲でない。支那朝鮮が日本だけの進歩をなし得ないのは、他に自ら理由があるのであつて、若し彼等に日本政府程の、堅實な支配力があつたならば、決して今日のやうな状態に甘じるものでない。そしてその堅實な政府の出來ない理由は、多くは北方蠻人の南下に禍ひせられた

ので、これも地勢上已むを得ない事であつて、彼等朝鮮人、支那人を責むべき事でない。

この點に於て、四面海に圍まれてゐる日本、イギリス、又歐羅巴列國と離れてゐるアメリカ合衆國などは、實に天運に幸ひせられたものと言はねばならぬ。其三大強國を誇るは必ずしも、人權上の優秀を示すものでない。他の諸國も歐羅巴列強のやうに、既に大なる文明を産出した事に於ては、決して溫帶民族としての體面を恥かしめては居らぬ。たゞ餘りに各國が接近群居してゐる爲め、絶へず爭亂を免れないのである。そして又北方の禍を受けつゝある。若し幸にも歐羅巴合衆國なるものが成立すれば、優に其文明を向上せしめて餘りあるであらう。

寒帶文明の將來に就いては、今は何とも言ふ事は出來ないが、彼等民族はどうしても南下せざれば止まない勢を示してゐる。之れを溫帶民族が防禦し得るや否やは、今後の大なる問題である。バルチック海を封鎖されたロシヤは、黒海を経て地中海に出

んとし、此處にも其目的を果し得ず、遂に長驅シベリヤを経てウラジオに出で、更に南下して渤海灣に出んとしたが、これも亦日本及温帯同盟國の力により喰ひ止められて仕舞つた。昨今は共產主義宣傳を以て、思想的南下を企てつゝあるが、果して目的を達するや否やは問題である。たゞ恐るべきは、人種として北方人の活動力の旺盛なるに反し、熱帯温帯人は、自然に衰退に頻しつゝある事である。

進んで人種問題に言及しやう。

人種の區別は、主として其皮膚の色を基調としてゐる。けれどもこの色は全く氣候の結果で、人種固有のものではない。日光の恩澤を受ける程度に従ひ、黒色、赤色黄色となるので、所謂白種人種と稱する人々も、南洋やアフリカに住つてゐる者は、次第に有色人となりつゝある。私は北米に十年住つた爲、過般歸朝の際顔が白くなつたと言はれて、噴飯したが、自然に少しは色が褪めて來る。日本内でも、北と南の人とは、その色が非常に違ふ。マルコポロの記事に

「ジャバングーは、大陸を距ること一千五百哩の洋中にある東方の大なる島なり、其人民は色白く文明にして美麗なり」(山本秀雄氏日本基督教史)

とある。歐洲南方の人々と日本人とは其色に於て大差はない。たゞ黒色人種に比較的野蠻人が多いために、黒色と野蠻を同一視するのであるが、黒色人種の作つた古代文明は決して低級なものではなかつた。又彼等の間から生れた、釋迦マホメットの如きは、世界的偉人である。黒色人種の多數は、餘りに氣候温度の強烈な爲め智能上の發達を遂げる事が出來ずして、野蠻時代其儘に、停滞してゐるに過ぎぬ。現に北米に移されたアフリカ人は、頗る著しい進歩を遂げつゝある。

黄色人種の中から出た孔子、猶太人種から出た基督、白色人種から出たソクラテス等何づれも其民族的環境の間に、生育完成された人類の恩恵者である。斯のやうな人格者と、それにより生れた諸文明を繼承して、更に一大進歩を遂げたのが近代文明で、其多くの明星が、歐米の天地に輝く事は争はれぬ事實であるが、將來を望めば、日、支

の天地は決して暗黒でない。其昔、南歐の文化が爛熟して、全く生氣を失つた際、北歐の蠻人が南下して、其新文明に貢献したやうに、日支の北にはスラブ民族の蠻聲が、狼の如く唸つてゐる。此刺戟が必ず大なる活動力となつて、黄色人種を奮起せしむるに違ひない。日本のやうに四季寒暖の變化に富み、殊に火山的震動に依つて、絶えず強烈な教訓を受けるものは、必ずや將來、此新文明の世界に大貢献を爲すべき事を信じて疑はぬ。

今や人種の最も多く混同してゐる社會は、言ふ迄もなく、南北アメリカである。これは攝理的に、所謂東洋と西洋の中間に位し、南北に最長く延長してゐるが、これこそ、黑白黄赤悉くの人種が共同雜居し得る、理想的地域である。之れを白色人種のみが占領せんとしても、到底其目的を達し得ないのである。何故なれば、北方ノルデックレースは、南方極熱の地域に永住する事は出来ないからである。

現に布哇は、白色人種の所有ではあるが、其産業の當事者は、氣候風土の相近いフィ

リッピン、ポルトガル、支那、及び日本人である。特に日本人は其火山的な地質に於て、日本本土と極めてよく似たものがあるので、バインアップル、コーヒー、及び砂糖黍の栽培に於て、最適者である。日本人が渡布して初めて、今日の大産業となつたのである。その山坂の多い、水の豊かな、而も傾斜面と凹凸の多い土地及び屈曲婉々たる海岸線を有する、太平洋上の樂園を、見るからに美しい農場化したのは、主に日本人の貢献である。如何に排日法を制定しても、この布哇から日本人を退却せしめる事は出来ない。白色人種は、二三年をこの布哇に過すと、多くは病人となり到底永住は出来ないのが、その大勢である。勿論例外はあるが——そして其多くは地主格の人で、労働者としては極めて少數である。

米本土に於ける太平洋沿岸の如きも、日本本土と相對して居るので、非常によく似てゐる。今日活火山は一つもないが、南メキシコ迄の縦走連山は悉く火山跡である。従つて風光明媚な事は到底東部大西洋沿岸の如きものの比でない。或人は、シアトル

附近、所謂ブーゼットサウンドの絶景に、スエズ以上、實に世界第一だ、と言つてゐる。

見よ、南方には一萬四千尺のタコマ富士と邦人の呼ぶレニヤの高峰が聳え、カステードの連山は東に金屏風の如く連り、西にはオリムピヤの峻峰が妙義榛名の如く屹立してゐる。ブーゼットサウンド内に、點々として浮ぶ緑の島々は、我松島を幾百も合せた如き趣があり、更にワシントン、グリーン、ユニオン等の湖水と、その間に起伏する幾多の丘陵上に燦然として天に沖するスカイスクレーパー式の近代都市を見る時、眞に天にまで上げられた、エルサレムの感が湧く。

けれども、この様な、丘と川、水と木、石と砂の多い此沿岸を、誰れが最も善き産業地として利用し得るであらうか。

日本人は、大量的生産には適せないかも知れぬが、その小農主義を基礎として、永久的産業を起し、優に一大文明を作るべき素質を備へてゐる。

幸にして日米の了解が出来、兩國間に戦争の夢が消えるなれば、必ずや布哇の爲政

者が日本人を招いて、其産業を開發したやうに、再び太平洋岸に、日本人を招く時が来るかも知れぬ。

昨今アメリカ合衆國に於ける人種問題は、非常に消極的に陥つてゐる。是れは、餘りに複雑に陥りすぎ、統一に困難を感じるので、成る可く歐洲移民をも減少し、東洋移民は絶対に謝絶する事となつてゐる。此頃の不況の結果、歐洲移民をすら當分謝絶を望むやうな状態を示してゐる。兎に角この廣い米國を統一した社會生活に導くのは、容易な事でない。我等はこの苦心に同情し、徐ろにその統一を助成し、その後東洋移民をも歓迎し得る新時代を作るべきである。そして早晚その時の來るべき事は火を觀るより明かである。何故なれば、太平洋沿岸の將來は、どうしても東洋貿易によつて、其進路を開かねばならぬからである。

たゞ考へねばならぬ事は、日米關係の將來、及び日支、米支の關係である。

第三十一章 太平洋問題

今や世界の舞臺は、大西洋から太平洋に移らんとしてゐる。東西の兩岸には、西漸した西洋文明と、東漸した東洋文明が、各々その尖端を排列して、或は握手せんとし或は反撥せんとしてゐる。大西洋が同種民族間の葛藤場裡にあつたのと、大いに趣を異にしてゐるものと見なければならぬ。

一時西洋の文物が、東洋の天地を風靡し、其民族的西漸の勢も頗る恐るべきものに見えたが、治外法権を以て、支那や日本に所謂居留地を、所有した西洋人は、今や其影を隠し、貿易の高は年々増加するが、西洋人の東洋侵入は到底不可能となつた。それと同時に東洋人も、北米の地への入國は不可能となつた。只南米が今尚門戸を開放してゐるが、果して永續するかは問題である。兎に角今暫くは、所謂、東洋と西洋の對立は已むを得ない事であらう。そしてこの對立が將來互に反撥を起し、競争となり紛擾

となり、そして遂に戦争となるか、或は太平洋の名の示すやうに、互に了解し、互に親善を重ね、共同平和を結んで新文明を作るやうになるか、之れ實に將來の一大懸案である。

我等は何處迄も平和の爲、努力貢献せねばならぬが、その第一着として、先づ東西宗教の調和點を發見するのが、最大急務である。東洋の宗教は佛教に依つて代表され、西洋の宗教は基督教に依つて代表されてゐる。此兩宗教の一致點を擧げる時は、寧ろその殆んど相等しい事に驚かされる。けれどもどれだけ相類似し、相接近せる點が多くとも、其窮極に於て、相合致せない時は、寧ろその類似點は互に競争する機会となり、反撥の動機となる。これ實に宗教的争闘の、甚だ恐るべき所以である。恰も赤の他人に對しては、頗る冷靜であり得るが、近親や兄弟姉妹の間に於ては、其争ふ場合に於ては非常な激烈さを見ると同じである。此點に於ては、佛教と基督教の間の争ひよりは、基督教内に於ける争ひの方が遙かに恐るべきものかも知れぬ。勿論佛教

内の争闘も、過去に於ては相當激しかつたが、血を流すやうな事はなかつた。將來にもそんな事はないと思ふ。たゞ回教や印度教との關係を考へれば、なか／＼容易に安心は出来ぬ。けれども基督教内の争闘程に、怖るべきものではあるまい。基督教内の血腥い歴史は今更説く要もないが、現在に於てもロマンカソリックとプロテスタント諸教派との間に、尙激しい争がある。そしてこれは世界的に動きつゝあるのであるから、太平洋をもその渦中に巻き込まぬとも限らぬ。即ち東洋教化の争奪戦が起らぬとも限らぬ。現にロマンカソリック俗に言ふ舊教は、其傳統的宗教外交を、組織的に着々と進めつゝあるに反し、新教各派は、その分教的競争に禍されて、今や世界的傳道は大なる行詰りとなつてゐる。これを收集するには、各派一大合同をなすより他に途がないが、若しこの大合同が出来たとすれば舊教との對立は甚だ恐るべきものと、豫想せねばならぬ。

所がこゝに大なる緩和劑が、次第に勢力を占めつゝある。それは科學を基礎とした

教育運動である。此科學的教育を粉碎せんとした基督教は、既に過去に於て失敗した。今尙幾分の小競合はあるが、到底科學の勢力を葬り去る事は出来ぬ。太平洋兩岸の將來は、確かに教育の力に依つて開發せらるゝ事は、槌を以て大地を撃つが如く、確かな事である。そしてその批評の下に、社會の諸般が行はれるであらう。従つて宗教もその批評外にある事は出来ぬ。但し私は宗教を以て、科學に隸屬せよと言ふのではない。科學は科學、宗教は宗教である。けれども科學の未だ發達せざる間に於て、宗教が科學の領分をも支配し、一切の智能の世界を左右したやうな事は、今後は到底出來るものではない。科學は五感の世界を支配し、宗教は五感を超越した信仰の世界を支配すると言ふ風に、其領域を分明ならしむる必要がある。故に科學のメスは、必ずしも信仰の世界まで支配するとは言はぬが、その信仰が如何に五感の世界に働くかは、科學的に吟味せらるゝのである。この吟味は頗る精密巧緻で、一絲亂れざるを期するが故に、宗教もその目に見ゆる世界に働く限りには、科學の批評監視を免る

る事は出来ぬ。例へば他界主義の信仰が、如何に現世に其影響を及ぼすかと言ふ事は、單に宗教側の立場からのみ論證されたところで、科學教育を受けた一般民衆は容易に承知しない。若しその信仰の結果が、現實生活を殺し、道徳を無視し、向上心を鈍らし、結局社會の秩序を亂すやうになれば、この宗教は現世的存在を許されない事となる。更に又其現世主義信仰が、極端な否定主義に陥り、或は革命的となる場合には、宗教それ自身の信仰に就いては、如何とすることも出来ぬが一般社會はこれに對し、科學的批評を試るのである。故に科學が嚴正中立の態度を保ち、公平無視に立脚して、宗教の實際行動を監視する事は、其横暴と變調異態を矯正し、又空しき論争紛議を惹起せしめない爲、大なる力となるのである。

若し幸ひにして、東西各宗教が其教派的勢力争ひを捨て、眞正の宗教生活を以て、此地上を幾分でも理想化せんと努力すれば、太平洋兩岸に如何程の宗教があつても決して差支へない。否このやうな宗教であれば、必ず社會人心を教化して、太平洋上に平

和を齎らす上に、大なる貢獻をなし得るのである。

今科學的研究の結果として、東西兩宗教が、社會人心に及ぼした歴史的事實を概説すると次のやうなものである。

便宜上、人文發達の順序を左の四期に分つ。

- (一)肉感的時代 即ち人文發達の初期で、五感の齎らす初發感情を土臺とした時代である。小兒で言へば乳兒時代で、其活動は大體反射作用が主とされてゐる。
- (二)體力的時代 反射作用が意識作用となり體力が増進して、自己以外の物を認識し、形體物を主として生活する時代で子供で言へば所謂少年期である。
- (三)智力的時代 少年期より進んで青年期に達し、智力的活動が旺盛に發達する時代。

(四)靈力的時代 成人期であつて、智力發達は一定限度に達し、百尺竿頭一步を進めて、靈界の生活に入る時代を言ふ。

以上の四期は、個人生活に倣つたのであるが、社會人類の發達にも、同種類の四期のある事を見るのである。今此四期に従ひ、東西宗教の發達變遷を見ると、次の如き事を發見するのである。

第一期即ち肉感時代とも言ふべき人文初發に於て、人類宗教の萌芽は、肉感的宗教換言すれば、諸物崇拜にその端を發してゐる。そしてこれを東西に比較して見ると、東洋は主として、天然物を崇拜の目的とし、西洋は人間を崇拜したと言ひ得る。但し日本の祖先崇拜獨逸の森林崇拜などは、東西何づれにも類似點を有する證據で、決して絶對論は出來ぬ。そして肉感的宗教第二步は、東洋特に日本に於て、太陽崇拜の代りに、太陽神として、靈物的に天照大神を崇拜する事と、西洋宗教の祖たる猶太教に於て、人格神エホバを拜したのと、其趣を同じうしてゐる事を見る。

次に第二期體力時代は、主に物體を主とするところから、其宗教は寺院宗教及び少し進んで黄金崇拜と言ふやうな宗教的生活がある。東洋では佛教の寺院宗教である事

は顯著な事であるが、西洋ではカソリックが同じく寺院宗教と見做される。之等寺院宗教の次に、黄金崇拜が、洋の東西に流行した事も相似てゐる。第三期智力的時代には經典中心の宗教と、教義中心の宗教とが發達して來る。東洋に於ける儒教の經典崇拜は、西洋の聖書崇拜に比すべく、東洋佛教の教義中心は、西洋の新教諸宗派の教義中心と等し。

第四期靈力時代には、宗教の眞髓に突入せんとする時代で、他界主義宗教と靈力的宗教との二つを數へる事が出来る。東洋に於て他界主義宗教は、佛教中の最も靈的なものに依つて代表され、西洋では新舊基督教中の最も靈的なものに於て、之れを見る事が出来る。けれども他界主義のみでは、未だ宗教が完成したと言へぬ。他界主義は觀念的に陥り、眞の宗教的能力を失ふ事がある。眞の活ける宗教は、靈力的宗教であらねばならぬ。之れは恐らく今後の宗教に期待されるもので、東洋にも西洋にも共に未だ實現されてゐると言へぬ。けれども日本に於ける武士道の精神生活と、西洋の基督

教中心の精神生活とは、その靈的たる點に於て相似てゐると言へる。特にその家族的な點に於て似たものがある。何づれも家庭中心の社會組織を以て、理想的神國と信じてゐる。若し日本が其神の國觀を、基督教の神の國觀に延長して、世界的共通の神の國となす事が出来れば、これは單に日本の萬歳を保證するのみならず、又西洋諸國をも照すものとなるのである。何故なら、西洋諸國は今や、その個人主義に禍されて、殆んど家庭生活を破壊して仕舞はうとしてゐるからである。今日までの基督教が、此個人主義と戦ひ、所謂スキートホームを維持して來た事は、その活力如何に大なるかを證明するものであるが、今や物質的文明に煽られて、個人主義は怖るべき勢で社會を威嚇し、殆んどスキートホームの片影をさへ失はんとしてゐるのである。けれども、西洋を救ひ、又基督教を救ふものは、靈力を基礎とした、基督教的家庭であらねばならぬ。

アイオア州グリネル大學教授エドワード、エ、スタイナー氏は、年若くして獨逸か

ら米國へ渡つた猶太人であるが、紐育上陸後、あらゆる米國の暗黒街を引き廻され、米國に對し、心底から憎惡の感に充たされたのである。ところが一日汽車の上から、アイリッシュボーイに足を捉られ墜落して脚部を傷め、一寒村に辿りつき、其處に彼を歓迎してくれた一家庭と其地の教會の牧師の家庭とに於て、初めて純基督教的家庭の情味に接し、遂にクリスチャンとなり、神學校に學び、今はアップライドクリスチャーチの教授として、米國の眞の愛國者となつてゐる。これによつて宗教的家庭の價值を知る事が出來た。

第三十二章 太平洋上の基督

極端な他界主義に陥つたロマンカトリック教では、キリストを天上界に祭り上げ、地上との交渉は寧ろ聖母マリヤに依頼するやうになつた。プロテスタント勃興と共に、キリストは信仰の中心として、其正位に復したのであるが、其他界的個人主義は、キリストの十字架を遠くカルバリ山上に眺め、其存在を來來世界に止めたのは、丁度眞宗の阿彌陀如來が極樂淨土に在ると同じやうであつた。けれども中世紀の修道院生活及び神秘派の人々の間には、靈的キリストの感化は、イエスと共に實生活を營んだ、イエスの在世中の直弟子等と似たものであつた。近世の外國傳道は、専ら他界への救濟を主眼として、キリストの十字架を萬國に宣傳したのであるが、諸外國に於ける各種宗教の研究の結果、基督教のみの優秀權を強制する事が出来なくなつた爲、且つ又、現世生活が何處の民族にも非常に切迫した問題となつた爲、キリストは單に未來世の救

主たるよりは、現實生活の救主として要求せらるゝやうになつた。其最も著るしい例は印度に於けるキリストの信仰で、スタンレージョンズ氏が、この間の消息を明かに説明してゐる。

私が宗教界に身を投ずる際、印度の國情が大きい刺戟を與へた事を、この書の初めに記してゐいたが、今やマハトマ、ガンデー氏により、印度は世界的興味を中心とせられてゐる。ガンデー氏は印度教徒であり乍ら、イエス、キリストに親炙して、其無抵抗主義を實踐し、自ら印度民族の苦痛を一身に荷つて、イエスと共に十字架を採りつゝある、氏の一舉一動は生けるキリストを再び地上に見るやうに感せしむるものがある。

一時日本に於ても、基督再來說が盛に行はれ、又我こそは、活けるキリストなりとか、或は佛陀メッサヤナリなどの名乗を上げたものであつた。けれどもガンデー氏程、眞剣な實行者は出なかつた。

西洋各國では、人間としてのイエス傳を書く事が、近來の大流行で、毎年二三冊は必ず出版される。そして愈々出でて彌々俗に墮落しつゝある傾向を示し、特に劇化されたり、映畫化されたものには、俗悪なものがある。けれどもこの一大傾向は、キリストを天上界より引き降し、人間界にその存在を見んと願ふ切なる要求の結果に外ならぬ。宗教界に於ては殊に再臨派の中に、その激烈な要求を見るのである。このやうに人類の要求の中心となりつゝあるキリストの本質は、果して何物であるか。

三位一體のイエス、キリストは、論議の題目とするやうな觀念體でなくて、實驗實證すべき實質體である。此實質體はヨハネ傳に依れば、ロゴスであり、共觀福音書に依れば、聖靈に依つて生れたものである。神の子であると同時に人の子である。形體を去つた方が、其真相を知る上には、寧ろ容易であるが、肉となつて地上に生活せられた事を否む者は、キリストの靈を持たぬ者であると言はれてゐる。このやうなキリストは、神の實在と全くその意識を同じうするものである。故にキリストは父なる神

と常に一體として存在するものである。彼には時間と空間がない。永遠より永遠に亘る存在者である。地中海上のキリストたると同時に、大西洋上のキリストであり得た、そして更に進んで、太平洋上のキリストであり得るのである。

ヨハネ黙示録の記者は、地中海上のキリストを望んで、其大勝利を預言したが、誰れが太平洋上のキリストを仰いで、新黙示録を書くであらうか。當時の七つの教會に比すべき教會は世界の表に群をなしてゐる。ロマ大帝國に比すべき物質文明は、今やその斷末魔に頻しつゝある。果して千年王國のヴィジョンは起らないか。新天地が神の御許より降り來るのを見る人はいないか。活けるキリストは今や既に我等の間に臨みつつあり給はぬか。

「イン、ヒズ、ステップス」の姉妹篇、「ジーザス、イズ、ヒーヤ」はチャールズ、シエルドン博士の名著であるが、餘り多くの人に讀まれて居らぬ。

私はあの書物に描き出されたやうな、血あり涙あり、而も此世ならざる大千世界に

安住する、活ける二十世紀のキリストを、太平洋上に仰がんと望んでゐるものである。

シエルドン博士は、レイモンドと言ふ米國の一都市を撰んで、キリストの活動を描いてゐるが、私に小説家の筆があれば、太平洋兩岸を舞臺として、その活動を描いて見たいと思ふ。けれども私には小説家の筆が無い代りに、寧ろキリストの心を其儘、肉筆を以て肉脾に書き著ける方が、本統かも知れぬ。活けるキリストの問題は、小説にするには餘り眞剣で、又餘りに實質的なものである。

北米シアトルと言ふ、天に上げられたやうな、風光明媚な世界的都市にキリストの撰びを受けて、今現に私は一牧者として生活してゐる。キリストを筆にするよりも、其儘生活にする方が、手近な可能的な事である。

トルストイは英米のキリスト教徒を總稱して、偽善者であると宣言し、又日本人等も多く米國人を偽善者と言ふ。このやうに總てのキリスト教徒を偽善者と見る傾向が、此太平洋沿岸に於ても、非常に強い。恰も其昔キリストがパリサイ人や學者達に

「汝偽善者よ」と呼びかけられたと同じ事が、今のキリスト教徒に呼びかけられてゐる。その理由は、今の基督者が、中世紀以來の觀念主義を脱し得ないからである。例へば、聖徒と言へば直ちに無慾なる世捨人、喜怒哀樂一切を超越した神人、此世ならざる天國に、常住する仙人といふ風に考へられてゐる。故に牧師などは、天上界に屬すべきもので、木佛、金佛同様に見られてゐる。

會て、クリスチャンが親睦會の席上、座敷相撲を取つたのを見て、其儘求道心を捨てた人があつたとは、随分古い話であるが、沿岸の教會などへ來て見て、所謂クリスチャンの言行を見せつけられる人々は、大抵クリスチャンを偽善者と思ふやうになる。之れはクリスチャンの罪でもあるが、又世間一般の觀念が舊式である爲でもある。所謂聖俗の區別が、今尙多くの人々の頭を支配してゐるので、世間の人々は宗教に屬する者を聖なるものと思ひ、宗教家も又、自ら聖なる世界に屬するものと思つてゐる。ところが今日の新教教徒は、僧侶生活を捨て、家庭生活を採用して居り、クリ

スチャンは悉く俗生活に没頭して、金儲けに狂奔してゐる。一週一回は教會堂に集つて、聖歌をうたひ、聖書を耳にし、聖徒の交りを樂しみ、さながら天國にある如く、兄弟の愛、同胞の親みを交換し、如何にもクリスチャンの理想を仰ぐ事が出来るが、一度ウィークデーとなつて、ビジネス世界へ這入ると、會堂内の兄弟姉妹は化して、赤鬼青鬼となる場合が少くない。此世を捨てよ、天國を求めよ、一切の罪より離れ、ただキリストを衣よと説教する傳道者達も、聴衆の多寡、献金の多少を懸念しないわけにはゆかぬ。勿論傳道の爲の懸念には相違ないが、經濟問題にのみ捉はれてゐる普通一般の人々から見ると、教壇から絶へず献金の多からん事を獎勵され、集金の多い時は、賣上げの多い商人と少しも違はない心理状態を見せつけられ、甚しい時は血の出るやうな献金犠牲談が、直ちに黄金化せられるのを見る時、彼等は直ちに割のいゝ商賣だと、早合點をするのである。斯く商品化された宗教は、金錢問題の外又他に重要な問題はないと言ふ實際に到著する事となつた。或大教會の扉に「何々牧師の銀行」と

落書してあつたのを見て、如何にも穿つた皮肉だと思つた。

難行苦業献身犠牲を商賣にする似非宗教家は、必ずしも自らを偽善者とは思はぬ。夫の兩頬の肉を、一本の太針で縫つて斷食の苦行を看板に、塔堂伽藍の寄進を勸請するやうなのは決して虚偽奸惡とは言へぬ。けれども親の爲身を賣り、節操を金にするのと、其趣きは同じ事である。

斯く觀て來れば、所謂現状暴露の悲哀、たゞ生きさんが爲の努力に外ならぬ。けれども宗教も生きさんがための宗教であり、商賣も生きさんがための商賣でありとすれば、少くともこゝに「生きさんが爲」と言ふ一味平等の共同世界が現出して來るではないか。

曾て、羅馬書と法華經の比較に於て、ポーロの肉の念と靈の念を、差別相と平等相に翻譯したのであるが、これを現代生活に適用出來れば、生きさんがため、努力しつゝある一切の人類を、一味平等の共同世界に攝取して、此處に民族、人種階級を超越した、精神界或は靈界を觀る事が出来ると思ふ。此共同世界の平等相を思ふものが靈の

念で、個別世界に執着し、差別的個相に捉はれたものを「肉の念」と見る時は、「靈の念」は肉に逆ひ、「肉の念」は靈に逆ふ事が明白に了解される。

若し「靈の念」とは宗教的事であり、「肉の念」は俗生活の事であると解釋すると、宗教と經濟の衝突、聖俗の分離、精神と肉體の反撥となり、結局宗教の破滅、經濟世界の行詰りとなる外はない。そしてこれこそ今日の現状なのである。

若しこのやうな生きさんが爲の一味平等の世界が、靈界の門であり、此處に人間生活の基調がありとすれば、イエス、キリストの立脚地を此處に見出す事が出来ないであらうか。二、三人わが名によりて集る所に、我もその内にあるなり（マタイ傳十八。二十）とはイエスの在世中の約束である。即ちキリストの名の下に、二三人乃至幾百人が共同生活を營む所に、イエス御自身も、共に在るのである。故にキリストの主義に基き、社會生活を營むところに、キリストも靈的實在を以て親しく親ら臨み給ふのである。そしてこのイエスの臨在は、「わが來るは羊に生命を得しめかつ豊に得しめん爲

なり（ヨハネ傳十。十）とあるやうに、我等人類の全生命を、完全に發達成長せしめんが爲である。故にイエスの名によつて集團生活を營む教會は、此世より選ばれたものに相違ないが又此世を捨てたものでもない。此世の中にあつて、此世に生命を得しめ、且つ豊かならしめんために撰ばれた機關である。此世を離れ、此世を脱ぎ去ると言ふのは、差別相に基づく我執を去り、利己貪慾主義爭奪の世界を捨て、相互扶助、共存共榮、慈善恩愛の平等界に入れとの事に外ならぬ。

故に、教會を組織すると言ふ事は、此共同社會を捨て、天國行の道者を募集する移民學校のやうなものを作るのではなく、又其勢力を頼んで、社會人心を左右せんとする政黨の如きものでもない。人物の多少、建築の壯美、金力の如何は其主要要素因ではない。たゞどれ丈共同生活に貢献するか、どれ丈生命發展に寄與するか、換言すればどれ丈愛を實現するかと言ふ事である。但しこれは必ずしも世に言ふ、社會的基督教會を指すものではない。限りある教會員の力を以て、限りない社會の要求に應じ、そ

の救済を一手に引受けんとするやうな事は、無謀も甚しいものである。イエスが三十三の働き盛りで、社會人心の期待に反し、斷然十字架に懸つて、其形體的存在を此世界から取り去り給ふたのは、之れは目に見えるものに依らず、目に見えない靈力を生活の基調となさんが爲である。此靈的實在者たるキリストを中心に、靈的生活を營む人々の集團が教會である。此撰ばれた人々は、教會に於て靈的富を、豊かに與へられる約束を得てゐる。この豊かな靈的富は、現世の共同生活に、大なる資源を與へるのみならず、又未來の永生をも保證するものである。即ち人を愛する事が、神を愛する事となり、人に仕へる事が神に仕へる事となる。故に我等基督教者の任務は、社會生活其儘で、教會と云ふ永遠化された靈的機關に、其能力を提供し自らの救ひと、社會の救ひを全うする爲に、靈的富の生産者となる事である。そしてこの靈的富の所有者は、其儘社會の物質的生產機關を永遠化して、社會の永久安泰を助長するものとなるのである。

現代社會の大缺陷は、此靈的富を以て物質的生產機關を永遠化する、撰ばれた人格者の無い事である。たゞ差別我の奴隷となり自らのみ多く持たんと狂奔して、遂に自らの持てるものをも奪はれつゝあるのである。「持てるものは與へられて、尙餘りあり」と言ふのは、靈的富の所有者を言ふたものである。

我等は今や、此靈界の主たるキリストを、太平洋上に所有してゐる。彼の靈的實在たる事は、目に見えない電力が實在であり、耳に聞えないラジオが實在である以上確實不動の事實である。

私は再臨論者が、何故主の形體的降臨を要求するかに就いて、非常に怪しむものである。彼等は信者の数の増さん事と、献金の多からん事と、狂暴的リバイバルを以て、この社會を騒がし、現世界を否定して、只管キリストの肉的再臨に依つて、新天地の出現を期待し、甚だしいのは、何年何月何日に、主は來り給ふが故に、一切を投げ棄てて、其國に迎へらるる準備をせよと説く者がある。こんな事は一時的には献金の高を

増す事があつても、其全生活は到底破産を免れない。

現代のやうな渾沌とした時代に於ては、一種革命的氣分に満たされ易いのは、當然な勢であるが、キリストを主と仰ぐ者は、決して迷ふべきでない。二三人集る所には主も偕に在すのである。

主と偕に十字架を取りつゝ、神の無盡藏の倉から與へらるゝ、豊滿な靈的富を分配するのが急務である、又太平洋上に平和を齎らす最大な要訣である。

第三十三章 價值判斷の基準

凡ての價值は比較的なものである。絶對の眞理は少くとも人間の經驗内に於ては存在しないやうに、絶對の價值も人間の經驗内に於ては存在しない。けれども何かの基準が無い時は、價值は價值とならぬ。そしてこの基準が、多すぎた時は價值の混亂となるので、その基準を成る可く單純にする必要がある。幸にこの基準が單一である時は、稍々絶對に近いものとなる。

例へば物質的諸價值を、一つの單位基準に照して測定する時は、其交換貿易が非常に便利となる。即ち貨幣が單一基準となるのである。ところがこの貨幣も各國によつてその材料が違ふので、金銀銅鐵等千差萬別の場合は交換貿易上甚だ不便である。それがために金銀本位となり、遂に金本位となつたのである。

恐らく世界に於て、價值判斷の基準として、黄金程純一純粹なものは他にありません。

故に黄金を價値の定規とし、これを無上に尊ぶやうになつた。けれども黄金其物の價値と、價値の定規としての黄金とは、自ら別物である。ところがこの二つを混同する爲に、絶えず實際上の價値を變動せしむる事となる。

例へば金貨一個に對し、紙幣一枚を一圓として、價値の定規とするのであるが、紙幣よりも金貨其物を手に入れようとする慾求が盛なため、金貨一個が時に一圓紙幣二枚と交換される事がある。こうすると紙幣を持つてゐる人は非常に損をするので、紙幣の信用が無くなる。なれば金貨のみを通用すればと言ふ意見が、出るが金貨は削つたり、潰したり或は隠匿したりする、又そうしないとしても通用の際の自然の磨滅を免れない。このやうに金貨本位の社會でも、決して完全な基準が出来たとは言へない。

けれども、政府或は銀行に信用があれば、準備金の如何に關せず、一圓は一圓に通用するのである。此信用を亂用するか、害する事件、即ち戦争とか産業不振が勃發す

る時は、忽ち其價格に變動を起す事になる。故に價値判斷の基準に對しては、信用と言ふ目に見えない要素のある事を、承認せねばならぬ。

では、信用とは何ぞや、これは黄金のみでは測定が出来ぬ、より高い價値である。そしてこの信用は準備金の幾層倍をも融通し得る能力を持つてゐる。けれども一度信用を失墜すると、忽ち取附けに遭ひ破産の憂目を見る事となる。すればこの信用なるもの、能力は、如何なる基準に依つて測定すべきか、どれ丈までが信用能力の範圍か、又何處からその範圍外であるか、とは實に困難な問題である。世には所謂有限責任に對し、無限責任なるものがある。前者は資本の限りに於て、其責任が盡きるのであるが、後者は資本以外、個人的責任を無限に引受けると言ふので、これは有形物以上人格の擔保を承認する事となる。このやうな最高責任感は、誰れでもが所有し得るものではないが、一國の元首家庭の主人などが、其國家興亡を一身に負ひ、如何なる事があつても其責任を免れようとしなない。そしてこの絶對無限の責任感のあるところ

に、絶対無限の信用が生れるのである。

西郷南洲が天を相手として、國家の大任を自ら衝つた態度は、實にこの責任感から來たものである。キリストが世界人類の爲め、其一身を十字架に懸け、死して尙その責任を解かず、永遠無窮に信頼の保證となり給ふたのは、實に此絶対無限の境地から進み出た、靈的實力に基くのである。

人間が有限界に彷徨する間は、決して安定不動の價值判斷を保つ事は出來ない。此無限絶対界の根柢から、萬古不易の權威となつて有限界に臨在する、均等公平不偏不黨の基準であらねばならぬ。之れは言ふまでもなく神の外にないのであるが、この神の基準的臨在を、此有限界に刻印したものは、實にイエスキリストである。故にイエスキリストを信じて、この無限責任を負ふ所に無限信用が生れるのである。この無限信用のある所に、價值判斷の基準が確定せらるゝのである。

信用とは、未だ見ざる世界を信用する事である、此見ざる世界、即ち五感以上の世

界は、無限は大千世界であつて、これを疑ふところに、百鬼夜行の恐怖蒐集し、これを信ずる事に依つて、光明遍照融通無礙の別天地が開展して來るのである。この別天地が不動の安住地となる時この動き易い有限世界の諸物は、悉くそれぞれの意義を持ち一つとして價值を持たないものは、無くなるのである。空の鳥を見ても、野の百合の花を見ても、凡て皆意味深長な絶対物となるのである。まして天上の星晨、海底の魚貝、沙漠の土砂、地中の火熱一つとして價值のないものはない。そしてこの宇宙は價值豊満の大寶庫となる事を知るのである。この大寶庫にあり乍ら、何を苦んで自ら小牢獄を造り、その内に蟄居して、空しくこの寶庫を埋没し去らんとするのであるか。

黄金は決して價值の基準ではない。たゞ物々交換の媒物であるに過ぎぬ。これを多く蓄へる事は、決して多くの價值を蓄へる事ではない。否、これを無意味に蓄積する事は、天下の通用を阻害する事で、社會共同生活の賊である。よくこれを日夜運轉し

て、眞正の價値を増殖する事に貢献せねばならぬ。即ち永續的價値を有する肉感的文化の發展、勞働能力の向上増進、科學研究の助長、宗教普及の努力等、その注ぐべき方面は無限にある。人世を豊富にし、社會を永續せしめ、個人々々の特性をその最高限度にまで伸長せしめる事が、眞正の價値である。若しこれを顛倒して、凡ての能力を、悉く黄金化する時は、人間は遂に餓死する外はない。

現代の行詰りが、これを證明して餘りあるのである。

第三十四章 價値の歴史

歴史は凡て價値の歴史である。之れを大別すると、精神的と、物質的の二つとする事が出来るが、この兩者は互に交錯補足してゐるから、分離して論ずる事は出来ぬ。

譬へば、一基の果樹は、目に美しく感じ、口に甘く味はれる間は、人間に取つて精神的價値であるが、この價値を基礎として、果樹其物を、他の卵とか魚などと代へる時、この果樹は物質的價値を持つ事になるのである。普通の經濟は、この物質的價値のみを見て、その據つて來る精神的價値を測定しないから、物質の高下につき、的確な標準を見出し得ないのである。

今少し其歴史に就いて述べやう。

人類の原始時代は、所謂物々交換時代である。この場合には精神的價値が重大要素をなし、物質的價値は從屬的のものであつた。

即ちエソウが、一椀の羹を得んが爲、長子たる家督權を賣つたやうなもので、主觀的價値が重要動機となつて、物と物との交換を行ふのである。この精神的價値の如何を測定し、物々交換を運轉するのが、所謂商賣人でヤコブはこの商賣人の型を示す一人である。ヤコブがバダンアラムに行つて、永い滞在の後、多くの富を贏ち得たのは、彼の勞働の結果でもあるが、實はその商賣人的運轉の賜物である。エサウは朴訥愛すべき人であつたが、精神的價値の乏しい人であつた。これが聖書に、ヤコブが神の祝福を受けたと、記されてある所以である。こうして社會は物々交換の時代から、商業時代に進むのである。即ち多くの物品は、其物の直接與へる精神的價値から離れて物と物との交換價値、即ち商品として取扱はれるやうになるのである。この商品は、例令直接何等の精神的價値を、その人に與へずとも、優に商品として、賣買の目的とせられるのである。

これがやがて生産業の起る所以で、最初に企てられたものは農業である。この農業

の發達は、自然に剩餘價値を生むので、こゝに商業が起り、それが更に一轉して貿易の發達を招くのである。ところが貿易は、他地方の需要を熟知しなければならぬので、精神的價値の高度な測定が必要となつて來る。この機會に乗じて、所謂投機事業が起り、投機師が出て、投機的價値の混亂となるのである。

今日の世界的價値の混亂は、多くは此種の投機的經濟運轉に左右せらるゝ結果である。そしてこの投機業者は、頗る敏感な精神的價値判斷力を持つてゐるには違ひないが、甚だ怪しい者が多い。日本などでは全く迷信的な精神力に支配されて、投機場裡に狂奔するものが少くない。何々流行神様などと言ふものは、大抵此種の投機業者流によつて信仰せらるゝものである。

そこで如何にすれば、精神的價値測定を確信するかと言ふ問題が起るのであるが、これには經濟的生活の變遷に伴ふ、宗教的生活の歴史を知る必要がある。

物々交換の時代に於ては、精神的價値は只主觀的に決定せられるが故に、價値判斷

の基準が一定しない。そこで相當長い間の經驗からして、或種の物件が絶えず人間の要求物である事を知るに至つて、それを特別に摘出して、標準化されるのである。

エデンの園に於ける智慧の木（葡萄の樹であつたかも知れぬ）日本に於ける米などがそれである。此種のもは誰れにも必要物であり、又永く保存の出来るところから、自然にこれを神聖視するやうになり、此神聖な價値の保護者として、諸物崇拜の宗教が生れるのである。そして此宗教が威力を持つところに自然産業が盛んになるのである。

宗教の起源に就いては、今此所に詳論する事を避けるが、價値の永續性が、宗教の存立と重大な關係のある事は、争へぬ事實なのである。故に、物々交換時代には諸物崇拜、商業時代には靈物崇拜、農業時代には、寺院宗教、貿易時代には黄金崇拜となり、近世の國際的時代となつては、經典崇拜、教義中心等の宗教が、旺盛を極むるやうになつたのである。

彼のミレーが書いた「アンゼラス」を見るものは、如何に農業生活と寺院宗教が、シククリと相抱擁適合してゐるかを知る事が出来やう。ところが天下至る所に、貿易を事とするに至つては、寺院は何んの事をもなさぬ。黄金之れ宗教である。そして黄金に縁ある神々が、尊崇せらるゝりである。處が更に進んで各國の産業を起し、國際的經濟世界になつて來ると、産業の上にも商行爲の上にも、大なる精神的純一が必要となつて來る。之れが經典の權威或は教義の力により、社會民心を統率する宗教が勃興する所以で、西洋に於ける新教國が、その國富を増進し得たのはその大半は宗教の感化と言ひ得られるであらう。

日本に於て、明治維新以來國民の統一を維持して今日の大進歩を遂げ得た所以は、儒教の經典崇拜、佛教の教義中心が、大に與つて功を爲し得たと言ふも決して過言ではない。但しこの聖典崇拜教義中心の宗教は、多くは國家の奴隸となり、或は資本家の走狗となつて其産業と富の増進に、大なる効果を擧げ得た代りに、一般民衆を驅つ

て同じ奴隷の運命に沈淪せしめたのである。之れ社會主義者が宗教を以て阿片なりとし又魔酔劑なりと言ふ所以である。

資本主義なるものは、商業時代貿易時代機械的産業時代の諸價値を、綜合統一したものであつて、諸時代に於ける剩餘價値の總々に外ならぬ。そしてこの總々を爲すには、物々交換時代に於て商行爲を用ひ、一般民衆を利用搾取し、農業時代に於ては農民を、工業時代に於ては労働者を、各々其時相當の精神方を以て、利用搾取を遂げたのである。

此剩餘價値の綜合蒐集を、恰も泥棒詐欺師の行爲の如く考へ、社會主義者の多くは、資本家を以て、親代々からの仇敵と心得るのである。こうして階級争闘を絶叫するに至つたのであるが、之れは精神的價値の存在を認めない片手落の結果である。今日の資本主義なるものが、極端な精神的價値の物質化であると思ふ時は、之れを仇敵視する必要はない。現に物質化された機械工業が、其運轉を中止するや、資本家も勞

働者も共に苦しむのを見ても明かである。

中世紀に於ては極端な精神化によつて、社會は極貧に陥り、暗黒時代を現出したやうに、近世紀では極端な物質化によつて、社會は物資過剰の行詰りを來し、所謂バニックス時代を現出したのである。

要は此兩價値を適當に按配する事にある。そして今やこの新時代の幕明を宣言すべき暁となつた。若し廿世紀までの近世紀を、國際主義時代と言ふ事が出来れば、今後は世界的家族主義の時代と言ふべきであらうと思ふ。そしてこの新時代の經濟は、勿論資本主義でもなく、又所謂社會主義でもない。靈的宗教に依つて調和された共存共榮相互扶助の新經濟であらねばならぬ。そして、この新經濟の實現を來すべき靈的宗教は、經典主義を超越したものであつて、社會生活に則した生命的宗教であらねばならぬ。其果して如何なるものであるかに就いては、前段に述べたものにより、略々了解が出来ると思ふから再説する事をしない。

たゞこゝに單明にせねばならぬ問題は、需要供給の按配、物價安定の基準である。此世界的價値運轉の新舞臺に於て、再び投機的盲動に支配さるゝ時は、再び戰國時代となる外はない。すれば果して如何なる適法があるか、と聞かれると私にも今即答すでき名案がない。けれどもたゞ一つ、世界の需要供給物價變動の諸現象を、公平精緻に調査すべき、中央機關を設ける事である。そしてこれが衝に當る人々をして、利害得失の世間的爭議に超越せしむる事である。これは精神的能力の涵養によつて、成し遂げらるべきもので必ずしも不可なる事でない。一家の主婦が入ると出るとを計りて家の安定を計るやうに、世界平和の爲、其高低出入の諸現象を精細に調査する事は決して不可能でない。たゞその機會を利用して、自らを利せんとする私慾的行爲の侵入が恐しいのである。けれどもこのやうな反逆的行爲の取締りは、必ずしも困難ではない。人間各自の永生的價値の尊重は、自然このやうな、一時的價値の獲得を妨止するに至るであらうと思ふ。人間が安定でない限りは、何處かに欠陥の起る事は免れな

い。たゞこれを補足すべき努力は、何處迄も人間社會の負擔であらねばならぬ。

第三十五章 哲學の歸趣

人文發達の歴史に於て、物質的思想が主とせらるゝ時代があり、又精神的思想が主とせらるゝ時代がある。經濟が重んじらるゝ時代がある。經濟が重んじらるゝ時代と、宗教或は文藝などが重んじらるゝ時代とがある。そして又この兩者が統一調和せらるゝ時代があり、又統一より分岐に向ふ時代がある。之れを知るに最もよい道は哲學思想の歴史を觀る事である。

哲學はその時代々々に於ける、諸價値の綜合評價であつて必ずしも絶對眞理の表現ではないが、少くとも其時代に於ける最高評價を試みたものと見る事が出来る。

支那に於ける孔子、印度の釋迦、ギリシヤのソクラテス等は、古代文明の總評價を評みた世界的大哲學者である。而もその趣く所は各々多少異つてゐる。即ち支那は政治道德を主とした社會であつたので、孔子の思想は政治を主とした道德問題に集中せ

られ、印度は宗教國である結果、釋迦の思想は専ら宗教に傾き、ギリシヤは智識的追求の盛な地方であるので、ソクラテスの思想は重に智能主義に往來したのである。

此間に介在して、猶太民族の神政社會より生れ出たイエス、キリストは、哲學者と稱するにはあまりに實際主義に満ちてゐた。けれどもその言語には無限の蘊蓄があつて、人文諸相の最高評價を表示するものに外ならぬ。彼は價値其ものゝ生活者であつて、價値の評論者ではなかつた。イエスは評價さるべき目標であつて、評價者としての地位には屬してゐなかつた。我等は寧ろポーロを、孔子釋迦ソクラテスに比すべき大哲學者なりと言ふ事を憚らないのである。ポーロの思想が今日迄の西洋各國を感化した事は、決して右の三者に劣らぬが故である。

今、前掲の四大哲學者を東西に區分して見ると、孔子、釋迦は言ふ迄もなく東洋を代表し、ソクラテス、ポーロは西洋を代表してゐると見做す事が出来る。そして孔子は政治的智識主義である如く、ソクラテスも政治的智識主義である。そして釋迦が純宗

教的であるやうに、ポロも純宗教的である。この兩種思想が洋の東西に分れて、各々その發達の經路を辿つた事は、世界文化史上頗る興味ある現象である。東西兩洋の思想を余りに對比的に排列するのは、或は當を得ない場合もあるかも知れるが、人類の思想は大要同じ徑路を辿ると見るから、東西自らその趣を同じうする事は、必ずしも牽強附會の説と斷ずる事は出来ぬ。

勿論孔子とソクラテスとが、大體に思想の方面が相似てゐても、決して同じものではないやうに、釋迦とポロも、宗教的思想家たる點で相近いにしても、決して同じ思想家でない事は明かである。

孔子は徹頭徹尾君主政治の評論者であるが、ソクラテスは徹頭徹尾民主主義社會の評論者である。

又釋迦は汎神教主義宗教の解釋者であるに反し、ポロは一神教主義の註解者である。今此二様の流れが東西兩洋に於て相交又纏綿して、所謂東洋思想及び西洋思想を

構成した跡を質して、現在我等の立つてゐる所を明かにして見たいと思ふ。

先づ西洋の方に就いて言へば、ソクラテス以後プラトニー、アリストートル、の二大哲學者がある。前者は觀念主義の哲學を代表し、後者は實驗主義哲學の代表者と見られてゐる。そして、この二大哲學者が西洋思想の二大潮流を作つてゐると見て差支へない。新プラトニー派に至つて、此二大潮流を綜合した形となつたが、其未流は所謂詭辯派ソフニストと稱する哲學者の大勢を作り、思想的には甚だしい昏迷晦澁を來した。この時代を稱して暗黒時代と言ふのは決して過言ではない。

ところがポロを基點として流れ初めた宗教的思想は、猶太より小亞細亞に入り、ギリシヤヤを経て、大帝都ロマに波及し、オーゴスチンに至つて、ローマンカソリックの大神學を構成するやうになつた。ところが此神學に權威づけられたローマンカソリックは、法皇の神權を以て、當時の基督教社會を壓迫したので、此方面に於ても思想上の暗黒時代を迎へたのである。こうしてギリシヤ哲學の流れは、詭辯派の昏迷によつ

て勢力を失ひ、基督教界に於ては、ロマ法皇の絶対権により、全く思想上の自由を失ひ、爰に社會は、思想的最暗の夜と化したのである。

此間に於て、彼の悲惨な十字軍があつたのであるが、此遠征はギリシヤ文明の復興を促すと共に、基督教經典の光明に接する事により、更にエヂプト、アラビヤ地方の古代文明を拉し來つて、爰に新思想時代を生むやうになつた。此新時代に於て、ギリシヤ哲學の流を汲み、一大綜合を試たものがデカートである。之れと相匹敵して宗教界に一大綜合思想を與へたものが即ちルーテルである。

けれどもデカート以後、唯心哲學者として、ライブニッツ、バークレー等の思想家が現れ、實驗哲學者として、ロック、ヒューム等が現れた。それと相對照して、宗教界にはカルヴィンの正統派が漸次勢力を得ると共に、之れに反對するところの異端派が擡頭して來た。

其後哲學界ではカントの如き、ヘーゲルの如き大思想家が出でて、哲學思想の大綜

合を試みたのであるが、宗教界にはこれに匹敵すべき大思想家は起らなかつた。むしろカントの流を汲む神學者が、或はヘーゲルの流を汲む宗教家が、滔々としてプロテスタント社會に瀾蔓して來た。

斯くてヘーゲル以後、再び觀念主義哲學が、シャウベンハワー、ハルトマン、オイケン、ベルグソン、ゼームス等によつて唱導せらるゝや、他面には實證主義の哲學がコムト、ミル、スベンサー、ダルヴィン、マルクス等によつて唱導せらるゝに至つた。この間にあつて宗教界の思想は、自からこの哲學思想の大勢に支配されて、一方に觀念主義の神學を生み、他方これに對して實證主義の神學を生んだ。所謂、ファンダンメタリストとモダンニストとがその末流である。故にファンダメンタリストもモダンニストも共に末だ基督教本來の思想とは言へぬ。ギリシヤ哲學に支配された後天的思想たるを免れぬ。

元來ポロの思想そのものものが大いにギリシヤ思想に感化されて居ると言ふの

は決して論據の無い事ではない。故に近來ポロの思想から離脱して、純真な初代基督教の思想を汲み出さんとする新傾向が著しくなつた。其結果基督傳の研究となり、イエス、キリストの宗教其物を闡明にせんと試るやうになつた。此新傾向はポロ系の基督教以外にペテロ系統の基督教を、ロマ教會と言ふ形體化された宗教組織に於て發見し、思想的分裂の爲甚だしく弱められた新教を捨て、このロマ教に復歸するものが出來た。けれどもこのロマ教の形式的で他界的超世間であるのに満足せず、イエスの生活其ものを地上に實現せんと試みた聖者の跡を慕ふものが他面に起つて來た。これはヨハネ系統に屬する神秘派の流れである。トーマスアケンピス、セントフラシス、エックルト等の神秘家は、近世の基督教社會主義者を生み出した淵源であると言へる。所謂社會的基督教なども、實は實證哲學の感化が多いには違ひないが、一面にはイエス自身の宗教其ものを、實際生活に實現せんとする切なる希望によるものと言はねばならぬ。

殊に十九世紀以來の科學的智識は、實證的思想でなくては、最早何人も耳を傾けないと言ふ所まで、其威力を逞ふしたのである。この時に當り、觀念主義の神學であるポロ思想を離れて、實證主義の神秘派に走らんとするのは、止むを得ない自然の勢である。けれども二千年來泰西の宗教界を支配して來た大思想家ポロの神學を、弊履のやうに捨て去らんとするのは愚も亦甚だしいものと言はねばならぬ。そこで、此大威力のある科學思想に尻押しされた、實證主義宗教思想との關係を、如何にして保つべきかと言ふ事は、現代我等の前に置かれた一大問題である。

此難問題に手を觸れる前に東洋に於ける哲學思想の變遷を一瞥して見たい。

孔子に出立した儒教の哲學的傾向は、徹頭徹尾實證的である。即ち實踐躬行を主眼としたもので、思索的分子よりも律法的權威の方かその多分を占めてゐる。特に朱子派の儒學では、猶太教のモーゼの律法のやうに嚴正犯すべからざる道德的又政治的の命令であつたのである。たゞ陽明派の儒學では少しく思想的の分子を認め、觀念的要素

を用ひて言行一致の活道徳を主張したのであるが、其實踐躬行の實學たる點では、朱子派と少しも變りないばかりでなく寧ろ朱子派よりも、實行力の多かつた丈、實證主義としての特色を多く持つて居つたと言へる。朱子派は實證主義に違ひはないが、餘りに律法主義に陥つた爲全く形式主義となり、實踐躬行の實を失ひ、反つて僞善背徳を敢てするに至らしめ、所謂論語讀みの論語知らずとなつた。

之れに反し、佛教は純然たる觀念主義思想の叢淵であつた。孔子は唐虞三代の古學を研鑽し、集めて大成した人であるが、釋迦は菩提樹下に瞑想三昧を事とし八年にして大悟し八十に至るまで、絶えず說法輪轉して八萬四千の法藏を遺したと言はれてゐる。その多くは觀念主義のものである。大日如來と言ひ、阿彌陀如來と言ひ、或は地獄極樂など悉く觀念世界の産物である。涅槃の如き、成佛の如き、或は一切無一物と稱し、又天上天下唯我獨尊と宣言するもの、皆悉く坐上思念上の一大觀念である。勿論此思想界にも、單に思念觀相に上るものと、客觀的事相に依托して實證的形式を備

へたものがある。即ち自力門他力門の正別を生ずる所以である。

自力門では、純然たる主觀的觀念の世界にその窮極的解脱を求めるのであるが、それも又自ら二門に別れる事となる。即ち即身成佛門と生禪門とである。即身成佛は何等の外的要件を備へず即身即佛、一念にして忽ち解脱の妙境に達するのである。坐禪門も即身即佛には違ひないが、坐禪三昧の外的要件を伴ふもので、考案を用ひ問答を事とする等、大に實證的工夫を取るものである。

他力門に於ても、自ら二門を生じ聖道門及び俗諦門となる。聖道門は出家得道の生活を營み、或は難行苦業の巧徳により或は稱名念佛により、極樂往生の利益を受けるのである。俗諦門は敢て出家とならず又難行苦業をも要せず、たゞ信の一字を以て其身其儘佛の慈悲に御救を受けると言ふのである。故に自力他力と互に相去る事遠いやうに見えるが、即身即佛と俗諦門とは極めて相近く、坐禪門と聖道門とは又相似たものである。故にこの二門は二門のやうで、實は人間心内に於ては、たゞ一門があるばかり

りである。此一門を喝破して所謂自他圓融を宣言したものが、東海第一の傑僧日蓮上人である。今日の術語で言へば、觀念論と實證論を綜合統一したもので、慥かに一大哲學者たるを失はぬものである。けれども日蓮が果して、其綜合統一に成功したか否かは疑問である。何故なら、彼は其本尊論に於て一種のジレンマに陥つてゐる。即ち觀念主義から來た法本尊を立てる爲めに、法華經を本據としたのであるが、實證主義を把持する爲人本尊を立てんとした。即ち釋迦本尊である。そこで釋迦本尊を求める者は、どうしても釋迦に行かねばならぬ。ところが行き方は一種の循環であつて自他圓融と言ふけれども、實は自他循環である。法本尊と人本尊を互に往來して、結局歸する所を知らぬと言ふ羽目に陥り、今日に至るまで日蓮の末流は、その本尊論に於て終結するところを見ない。そして今や泰西の科學的思想が滂湃としてこの觀念主義佛教の虛を突くやうになつた。此思想に對抗せんが爲、一時釋迦本尊論が相當聲高く叫ばれたのであるが、未だ佛教各派を統一する權威とはならぬ。各派宗門に於ては、依然

舊來の觀念世界に籠城してゐるの外はない。特に昨今の經濟問題のやうな、人間生活の實質的難問を以て攻められては、觀念のみに生きて來た佛門の徒は、殆んど手の出しやうが無くなつたのである。

此點では、儒教も同様であつて、西洋の實學に對しては陽明の實學すら、太陽の光に掻き消された燈明のやうに、全然その勢力を失つて仕舞つた。そして明治聖代となつては全く科學萬能の世界を作り出す外なかつた。この科學萬能の實證學は、二十世紀の世界を風靡する資本主義對社會主義の爭議を起したもので、如何にも其實證學の本領を發揮して、餘蘊なきものである。

ところが、東洋民族中に一特色を有する日本國民は、儒教佛教の他に一種の神秘主義とも言ふべき「神ながらの道」がある。之れは精神的實證主義の顯現であつて、忠臣義士を起し武士道となり、大和魂となり、今尙潑刺として日本の上下を動かしてゐるものである。

此大和魂は、今では日本民族のみに限られた偏狭な愛國心と同一視されるやうな傾があるが、決してそうではない。徳川三百年の社稷を打破し、世界的日本を建設した、大精神を支持する所のものである。

故に此大和魂は、今後日本を世界に進展せしめる上に於て、西洋の世界主義と相呼應すべきものである。現に世界平和會議に参加し、軍縮問題に協力してゐるのを見ても明かである。そして更に一步を進めて、目下世界的の懸案である經濟界の行詰りに就いても、之れを世界的に解決すべき動力として、大和魂が其精力を發揚すべきは、蓋し當然な道程であると言はねばならぬ。

私は今思想世界から餘りに急激に、實際世界に突入したのであるが、之れは今日の實證學の然らしむるところで致し方がない。けれども私は決して實證學のみに押し流されて、勞資争闘の渦中に投じやうとは思はない。儒教佛教基督教の、廣大無邊の觀念世界を無視する事は出来ない。又西洋哲學の深遠悠久な思想系統を忘れる事は出来ない。

最後に、何處に此雜然とした思想界を綜合統一すべきか。

私の斷案はたゞ一つ、即ちイエス、キリストに於て之れを觀るのみ、と。

第三十六章 基督教主義經濟の一例

コロムビア鐘詰會社社長ウイリヤム、ハッブグッド氏は、昨今の經濟界の行詰りに際しその經營にかゝる産業的デモクラシーに就いて、一小冊子を發行して廣く天下の研究資料に供してゐられる。今其大要を摘記して見やう。

氏の會社は、千九百三年以來の經營であるが十六年迄は全然不成功であつた。千九百十七年初めて相當の利益を得たので、それまで其會社の持主なるハ氏の獨裁經營であつたのを、其年からデモクラシーの形式とした、と言ふのである。此變革の動機は、氏が學生時代にベースボール其他の競技に於ての實驗を土臺としたのである。

即ち學校内に於ける競技にさへ、競技者の社會的地位が威力を振つて、不適當な人物をも重要な地位に置くやうな事があつて、折角實力ある競技者をも其腕力を揮はしめない事がある。之れと同じ事が産業界にも實際にあるのである。そこで會社員全體

と相談の上斷然デモクラシー制度を採用したのである。此制度は從業員各自の機會均等を目標とするのであるが、其爲に事業經營上の成功を犠牲とするものではない。豊富な生活資料を得て全體の繁榮を期するものである。

即ち千九百二十九年六月三十日限り、年度の資金普通株二十五萬七千四百二十六弗、優先株五萬五千四百八十二弗、そして利益十二萬〇九百三十四弗三十四仙の計算となつてゐる。千九百三十年度十ヶ月の計算では、普通株二十五萬七千四百二十六弗、優先株九萬九千五百八十三弗、利益十三萬六千八十七弗七仙となつてゐる。此利益金中から税金、機械修繕費及び一定限の配當金を引去つた残額は、悉く從業員に分配されるものである。のみならず此制度の下では、從業員の生活安定及向上を目的とすると共に、購買者の利益をも計り、價格を出來得る限り低廉とし、又同業者の繁榮の爲にも餘財を投じて援助を計つてゐる。最初この制度の實施の際は、自治に慣れない從業員の疑惑のため、施政上の遲滯を感じたのであるが、今日では勞働者側に寧ろ

多くの施政能力を見出す事を證明した。そして事業經營上危険性を持つ者は、労働者でなくて反つて指導者側に屬してゐるものである。即ち彼等の方が物慾に誘惑せらるゝ機會が多いからである。若し彼等が指導能力其物の創造を樂しむやうになれば、世界の産業界は非常な革命を見るに違のない。

能力の偉大なものが、必ず多額な物質的報酬を受けねばならぬと言ふ道理はない。少くともデモクラシーや基督教の理想では、この不平等觀を否認するものである。まして、人間の能力或はその成功の大部分は、其人自らの所産と言ふよりは、其祖先、先進者境遇機會等に歸因するものが多い場合には殊にその平等觀を承認するのである。

人或は言ふかも知れない。斯の如き理想論は現代の様な私慾的社會にあつては、決して實現せらるべきものでないと。けれども多少でも行はれつゝ、ある事實は、必ずしも其不可能でない事を證明するのである。

或は又、コロムビア雜誌會社の従業員はその性行上特種の部類に屬した人々でないか、と言ふ。けれども、彼等従業員は普通の人々で、平均小學校四年程度の教育で、中學卒業がたゞ一人、中學一年或は二年程度の者數名で彼等の多數は農業工場等の労働階級より來たものであつた。右の内中學卒業者が一番知能力者であつたが、極端な個人主義者で一般の人々と調和しない爲、中途退社した。他に會計の任に撰ばれた人が、私慾的で短氣であつたので、これも退社した。其他の人々にも多少の困難はあつたが、今日では兎に角工場を單な生活資料收得の道具視せず、之れを労働する爲の家庭或は學校乃至修道靈化の道場と言ふ風な見解を持つやうになつた。其結果労働時間の長短など問題でなく、たゞ如何にすれば労働時間を有意義に教育的又生産的に、使ひ得るかと言ふのが問題となつた。

氏が、過去十三年間に於て其工場より學び得たものは、其以前の四十五年間に得たものよりも、遙かに有益なものが多かつた。殊に過去二年間に經驗したものは、産業

上頗る重要なものであつたから、それを少し述べて見よう。

先づ第一の事は、産業上の資源は物質よりも寧ろ人間の精神力にあると言ふ事である。産業の指導者は、物質の運轉よりも、人間の運轉により多くの興味を持たねばならぬ。労働者全體に投票権を與へる事は、或る場合には格別の好結果を齎らさない事もあるが、労働者を教育して、其中に潜められた能力を惹き出す上に於て、大なる刺戟となるものである。

初め會社の事務は、労働者側から七人、資本主側から三人、計十名の委員によつて處理されたのであるが、其後労働者側から協議委員を増加して之れに参加せしめ、各員平等の決議権を持つ協議會を組織して全事務を處理する事にした。斯くて労働者は、其投票が直接自家生活の安定向上に關する事を知つてゐるので、一般政治上の投票よりも大變有効に行使せらるゝやうになつた。一般政治界では、政治の内情を公開しないので、投票者はたゞ投票を行ふばかりで、その利害關係を詳しく知る事が出来

ない。そして、政界の腐敗が、多く實業關係から起る事を思ふ時、眞正の政治を行ふ爲にも、産業界のデモクラシーが切要な問題である事を思はせられる。

次に産業上大切な問題は労働時間である。

初め一週五十五時間の制度を採用したのであるが、毎年八月十五日より十月二十日まで、トメトリーシーズンには、此制度以上に働かねばならなかつた。けれども平均すると五十五時間は、長過ぎる觀があつた。そこで協議會では五十時間に切りつめたが、其後更に一週五日働となし一日九時間制とした。勿論場合に應じて伸縮の自由を持つてゐるから、決して生産に故障を起す事はない。此制度下にある労働者は、外觀上或は過勞と見へるかも知れぬが、興味を以つて充分な働きをする短時間の方が、興味のない長時間の働きよりずっと能率が上り、又健康上有効である。けれども極端な時間短縮を主張する譯ではない。凡て人間には、相當な勤勞は精神上にも肉體上にも、又靈性の上からも必要である。そしてその労働が興味を失はない爲には、時々そ

の持場を變更をする必要があるので、これも十分に考慮した。又智能労働者を筋肉労働者より優等の如く考へるのも大なる間違ひで、時々筋肉労働に服すべき方法を定め、又其労働時間をも均一にした。

第三の問題は、勤勞の永續である。解雇の憂を持つてゐる風では、決して安定した産業勤務に服する事は出来ない。

初めは少數者のみ年俸或は週俸とし、多數は日給制度を用ひたのであるが、日給制度は解雇の心配が伴ふので、遂に全部俸給制度に改める事にした。多少の弊害は伴ふが、今日迄の経験によると、不勉強の爲解雇された者はたゞ三人である。精神的安定が作業上の能率を加へる事は、不安定な精神に支配さるゝ日雇人より、遙かに多い。一時的な變動の多い事業では俸給制度は危険かも知れないが、そんな事業は寧ろ早く倒れた方が好いのである。若しこのやうに、労働者を不安定な地位に置くやうな産業を、其儘許可して置くなれば、重税を課して、解雇手當を政府から支拂ふやうにする

のが當然である。所謂優勝劣敗生存競争の理法を、このやうな問題に適用せんとするのは、丁度家庭の子女を猛獸の中に入れるやうなもので、結局社會自體の自滅を招く外はない。但し之は社會が株の配當のみに心を奪はれて、事業其物の永續を考へない間は決して行はれない。

第四は俸給額の事であるが、時間拂ひにして來た者には五十五時間を總計して、一週間給を定めそれを更に月俸或は年俸に直すのである。俸給制度の下では、時間外働オvertimeき又は短縮作業ショートタイムの爲、俸の増減をしない。協議會では週俸を五十二倍して、年俸を定める事にした。そしてこの年俸は會社の利益配當によつて増額せらるゝのである。

初めこの制度を採用した頃は、從來の年俸受領者は餘り利益を得なかつたが、時間給から年俸に引き直された労働者は、年二十五パーセント位の利益を得た。そして年々その利益は増加して一度も減俸をした事がない。けれどもその間、事業が不成功を見た事もあつたが、たゞこの事實上の損失を補ふために減俸を行ふよりは、従業員従業員の

能率を上げて損失を埋め合す事の方が、反つて得策である事を知つたのである。又或場合には低級な俸給者が一定標準に達する迄、高給者の年俸を一定の所に留めた事もある。そこで最低俸給標準を定める必要を知り、三年前それを十五弗としたのであるが、其後既婚者に對しては一週廿二弗二十歳以下の未婚者及び夫婦共稼ぎの婦人に對しては十九弗とした。ところが俸給は必要に應じて支給されねばならぬと言ふ議論が容れられて、今では未婚獨身者の最低を二十二弗と定め、結婚者は五十パーセント増額される事となつた。又子供の多少に應じて費用の相違が出来るので、子供一人に就いて、十六歳以下の者に一週二弗づゝの支給を追加した。更に家庭生活の必要物に對する討議の結果、食料被服住居保健教育娛樂の六項が規定された。勿論其程度に就いては、委員の詳細な調査を要するのであるが、給與不充分的訴へに對して、これ迄補給したものが六名中四名、一週三弗の増額要求に對し八弗を増額したものが一名ある。これはその申出よりも必要がより大きい事を認めたと爲である。

第五に従業者の社會的地位に就いて言へば、事務所員と工場員の間には在來の習慣で一種の差別があり、事務所員は工場員よりも社會的に上位にあるやうに考へられてゐた。けれども勤務時間も俸給も、共に同等にした爲、一時事務所員の移動を見たのであるが、今は全然同等と認められるやうになつた。又技術者も出来る限り同僚中からの志望者を募つて訓練する事にした爲、特に上位にあると言ふやうな考へを持たぬやうになつた。又時には従業員を智能労働者として教育する爲、その人物を學校へ送る事もあるが、其場合全時間を勉學に費す時はその必要供給を會社側でなし、若し又餘暇のある場合は、之れを工場で使用する事とした。斯くて大體に於て社會的地位は悉く平等に見られるやうになつた。初めは従業員の勤惰を査定する爲、出勤簿に定刻の記名を行ふ事にしたが、程なく協議會で此方法を撤廢する事にした。即ちこの規定は一部の人々の反抗を起し又特別な事情の下にある人の爲には實行不可能な場合があるからである。一婦人などは、その健康上協議會の方から、作業時間の短縮を強請した

位である。其後四人の従業員には、其勤務時間を其人の自由選擇に任せられた事がある。今では全く各自の自由によつてその勤務を伸縮する事にした。勿論此方法には危険の伴ふ事は明かではあるが、人間の利慾本能を基礎として規定を作るよりも、共存共榮の興味と責任觀念に基いて作業行程を取つた方が、今後の新しい精神に合致するやうに考へられるのである。

けれども絶対に従業員を自由を許すと言ふのではない。甚だしい無責任者に對しては調査委員の調査の結果を協議會に出し、協議の結果これ迄に入名の解雇を斷行した。

疾病事故老年及び解雇先職などに關しては、それ／＼適當な保護法が設けられ、又教育の設備も相當に整へられたが、尙將來十分な經驗に基いて完備されねばならぬ。

最後に労働者の株所有に關しては、千九百二十六年の好況時には五萬三百二十二弗の剰餘金が、労働者一般に分配された。之れは會社の普通株を買ふために用ひられた

のであるが、其株の所有に就いて、一個人のものとするべきか又全體のものとするべきか、を一般の意見に徴した結果、個人所有は將來獨占の恐があると言ふので、全集團の所有とする事に決定した。そしてこの株は新しく編成された契約書によつて規定され、數年後には全株數の五十一パーセントを所有するやうになつてゐる。この労働者所有問題は、労働同盟とか社會主義とか或は共產主義の争闘的手段によつて達成せらるべきものであらうか、或は勞資協調によつて成さるべきことであらうか。

人間の利慾性のみを見るものは、結局争闘手段に訴へるより外ないと見るであらうが、他方面に潜む善良な人間性を信ずる者は、争闘の手段を用ひずとも、此目的を達成するにあまり困難を感じないのである。

附 録

チャールレス、シエルドン原著

「イエス來ませり」

“Jesus is Here”

附 言

今から廿幾年前、岡山教會在職中、友人長坂鑒次郎君から、シエルドン博士の近著として、「ジーサス、イズ、ヒヤ」一冊を贈つて貰つた。其當時之れを讀むで、いたく感銘し、其梗概を、基督教世界に連載した事がある。渡米後ボストンの組合教會三年祭の節、新オールド、サウス教會の待合室で、シエルドン博士に偶然遭つた。是非あの書物を翻譯したいから承認して下さいと言ふ事を申込んだ所、承諾の旨を記した名刺を與へられた。其後多忙の爲め翻譯に手を下す事が出来なかつたが、「精神生活と産業」を發刊した際、丁度來遊中であつた松田道太郎君に依頼して、執筆を煩はす事とした。然るに全部終了に至らずして居る。

今回「實生活途上の基督」を出版するに際し、出來た部分丈けを附録として、同博士の思想の一端を紹介する事とした。

チャールレスシエルドン原著

「イエス來ませり」

“Jess
is
Her”

其一 血ある肉あるイエス

それはレイモンドの第一教會が「イエスならば如何になし給ふであらうか？」といふ標語を採用してから十五年後のことであつた。

その誓言は、それを採つた會員達によつて遵奉され遂行されつゝある間に教會を改革してしまつた。ヘンリー、マックスウエルは矢張り牧師を續けてゐた。教會員の中にはマックスウエル氏が會員の生活の中に始めて持ち來つたところの其規約によつて甚しく攪亂された者も多かつたが、大半は彼を支へ扶けて來たので彼は彼の大きな、そして尙も成長しつゝある會衆の尊敬と愛とを益々受けるようになりレイモンドの實

業家や市民の尊敬も増して來たのであつた。

マックスウエル氏と夫人とは或金曜日の夕方、其夜牧師館へ來る古い友人達の會合のことを語り合つてゐた。その日は第一教會がイエスの心になつて萬事を行つてみようといふ誓約を立てた記念日で、其後數年間の慣例に従つて、當時その誓約を立てた最初の仲間が夕飯後集つて主の弟子としての彼等の生活に就て新舊様々な方面から語り合ふと云ふのであつた。

其夜マックスウエル氏は何となく不思議にそわ／＼として心が落付かないように見へた彼は一通り待設けてゐる人々の名前に眼を通して了つて、彼の妻が色々の質問を發するにまかせて異つた人々に就いて自分の考へを談つてゐた。そうして話をしてゐる間中マックスウエル氏は絶えず居間の大きな西向きの窓と書齋との間を行つたり戻つたりしてコツコツと歩いてゐたが時々足を止めて、段々深さを増し又一見敬畏の念に打たれてゐるような好奇心をもつて、窓からうすれゆく薄暮を眺め入るのであつた。

『ロリンは今夜来る事が出来るでせうか？』マックスウエル夫人は先刻訊ねた。

『來られないだらうと思ふんだがね。シカゴへ行つて賣春に關して商業俱樂部と協議し、優生學會議に参加するようにつて囑托されてゐるんだ。今日の午後出立することにしてゐたと思ふんだが、併しレーチエルがヴァデニヤと一緒に來るだらう』

『ロリン、ベーチが斯うした社會奉仕問題の一權威になるなんて、まるで奇蹟のようぢやありませんの？』マックスウエル夫人は又暫くしてこう言つた。——マックスウエル氏はその前にまた再び立止り強烈な感情を面に表しながら西の窓を通して凝視した。

『全く奇蹟だ、メイリー、何故吾々は奇蹟は當然不自然な或は稀有なものであるとしてしまはなくてはならないのだらう？ 或は又それは此の世界の何か特別な時代に屬するものとしてしまふべきものであらう？ 何故に吾々の時代に奇蹟を期待してはならないのだらう？ 吾々はそれを求めてゐる。處がロリンは丁度斯うした奇蹟

なのだ。ロリン、ベーチを、ふしだらな、利己主義な、世間的な一俗紳士から、敬虔な、眞面目な、宗教的な愛人家と變へ、全身すつかり新しい人間となし昔日のロリンとは黑白の差よりも尙甚しく異つたものとして了つたのは全く一つの奇蹟的感化であると言ふより他はない』

『それや、勿論、若しあゝした生涯の變化が實際奇蹟であるとすれば、私達は奇蹟が今尙起るものであるといふ證據を澤山持つてゐますわ、でも私達は普通にそれを奇蹟と呼んでますかしら？』

『だつて、それ以外に呼びようがあるかね？ それに主御自身も、彼のお弟子達は彼自身なすつた事より遙かに偉大な働をするであらうとお仰つたぢやないか？ それから斯ういふ事があるんだ、メイリー、私自身近頃、何と言つていゝか自分でも説明することの出來ない一種の感で、一つの超人間的な幻影、神の現在の本當の顯現といつたようなものをしきりに心に求めてゐるのだが。それが何故かこう此時代の弟子達

基督者に與へられそうな氣がしてならないんだ、お、私は眞實な實際な血あり肉あるイエスを一目見たいと本當にこがれ求めるのだ。私は時々本當に彼の側近く寄つて顔と顔を合せて相見えなければならぬような氣がするんだ。彼は弟子達に「我は世の終りまでも、常に爾曹と共にあり」とお仰つた。若し彼が實際に此世に在し給ふなら何故吾々は彼にお會ひする事が出来ないのだらう、何時か實際にお會ひする事が？ 私は何うしても會はなければならぬ。私の胸は彼を求めて叫んでゐる。彼が必要なのだ。唯單に自分の信仰を強める爲だけではない。私は自分の口から彼に對する私の愛を何とかして言ひ表し度いのだ。それから私は此頃いつも考へるのだが、此の吾々の住んでゐる世界に若しイエスがお出でになるとすればイエスは何を爲さるだらう、何とお仰るだらう、彼がお住ひになつた世界とはそれはひどく異つてゐるんだもの。若し彼に會ふ事が出来、彼の言葉を聞くことが出来そして又彼に様々な質問をすることが出来るといふのだつたら、私は私の持つてゐるものを悉皆捨て、しまつても

惜しくはないが。そして、私は近頃度々考へた事だが——」ヘンリー、マックスウェルは言葉を切つて、考へ深い態度で彼の妻の方を見やつた「彼に取つては此地上に今一度お住みになる事も何とかして出来得る事なのではないかしら。彼が此世にお出でになつた時から最う随分久しいことになる、そして、世界は再び彼を要求し必要としてゐるんだ。此の長い幾世紀の間世界は争闘し、罪を犯し、苦しみ、愛し、そして耐えて來た、そして彼の名に於て又彼の爲に驚嘆すべき多くの事を爲した。世界の一時代に於ては普通一般の人間達がイエスを見、イエスに觸れ、イエスの聲を聞いた。然らば何故に他の時代の普通の人間が同じ榮光をその周りに輝かせることが出来てはならないのだらう？ 何故に神は再び此世界にその子を與へ、遠い遠い昔に嘗て來り給ふた彼の御姿を一目見る事によつて世界の勇氣を新しくし、その信仰を強める事をなし給ふてはならないのであらう？」

マックスウェル夫人は夫の深く且つ熱烈な感情の突發に驚いた。彼等の結婚生活の

長年の間又彼の教職の間に彼女は未だ曾て彼から斯様な事を聞いたことがなかつたのであつた。彼は手本として模倣しようとして来た主に献身する事を何よりの満足として弟子としての彼の道をずつと辿つて来たのであつて、彼の妻は今斯うして表れて来るようなものが彼の中にあらうとは思ひも付かなかつた。

彼女は起つて彼のところへ来た。彼はまた大きな窓の前に立止つてゐたが、今や、夫妻は相共に其所に佇んだ。そしてマックスウェル夫人は手を彼の腕に置き、心配さうな、なやましげな面持で、何んな思想があんなに夫を煩はせてゐるのであらうかと訝つた。併し彼女が話し掛けないうちに、彼らもう前に進み出てそしてずつと遠い遙か向ふの方を熱心に指した。

『彼處！ またあそこだ！ あの不思議な光！ 御覽！ メイリー！ 何うだあの空一杯になること！ 黄昏の筈はない。それにしては遅すぎる。それに、もう一月以上も見へるのだもの！ 何だらう？』

マックスウェル夫人は夫が願えてゐるのを感じずる事が出来た。彼女は彼の異常な亢奮を見てひどく心配になつたので、彼に知らせる氣にはなれなかつた、で彼女は靜かに答へた。

『あれに就いては前にも話を致しましたわね、あなたは覺へてゐらつしやるでせう、それは多くの理由に依つて容易に起り得るものだと言ふ事に二人で一致したのを。四年前に太平洋諸島に起つた地震が因で世界中に火山灰が浮漂した時に空一面に擴がつたあの一種異様な光を覺えてゐらつして？』

『だがこれには何かしらあれなどとは全然別な所があるよ。御覽！ メイリー！ 此の世の光ではない！ それには色彩も光芒も、運動も皆それ自身の特異なところがある。吾々は生れてから未だ曾て此様なものを見たことがない』

『あなたはそれで大層亢奮してゐらつしやいますわ』マックスウェル夫人は再びその手を夫の腕に靜かに置きながら言つた『私達の解らない何かの變動によつて起つた或

る自然的な光に違ひありませんわ』併しかく話しながらも、彼等二人ともに見たとこの此の異常なものを窓を通して夫と共にちつと凝視してゐるうちに彼女は驚異の感嘆を禁ずることが出来なかつたのであつた。

淡藍の、それは柔い淡い淡い色が地平線からずつとぼかしたように上に擴がつて、丁度それに照應するかの如く見へる深紅の波のところまで行つてゐる。そしてその二つの波が互に混交するにつれてその色は柔かに漸次にぼかされて言ふに言へない溶けるような純白の曲となるのであるがそれは一瞬間太陽とも月とも星の光とも比べる事の出来ないものである。それは浪のように後に又前に脈搏ち、そして渺茫無限の天空一面に充ち渡るばかりでなく、蒼穹のあらゆる間隙の隅々までも充たすかの如く見へ又計る事も出来ない光芒の大浪のように地球の上に落ちかゝりそこから飛散するまばゆき浪花は星に向つて投げられ而して更に何處かに未だ消費されずしてひそかに潜在し今にもその榮光を反復して、微妙なる心靈を以てそを了解する者を悦ばせんとしつ

つあるところのあらゆる世界の蓄積されたる力——それを思はせるような莊嚴なるゆるやかなさを以て消えゆくのであつた。

ヘンリー、マックスウエルはその光が靜に消え失せてから妻の方へ振向いた。

『メイリー、あのやうな光が火山灰に由つて出来ると言ふのかね？ でなければ地震の動搖？ あれこそ天の榮光であつた。それは——いや若しそれが彼の再臨の前兆だつたら何うだらう！ 若しそれが——』

彼はひどく亢奮し動搖してゐてマックスウエル夫人は彼を見て驚き氣遣はしく思つた程であつた。

『そんな事のあらう筈がありませんよ、ヘンリー、あなたは御自分の想像と憧憬とに走りすぎてあなたの平素の判断力を失つてゐらつしやるのですわ、こんな事言つたり爲たりして、あなたらしくもない』

マックスウエル夫人は窓の目除を下ろした、そしてマックスウエル氏は平素の穩か

な動作を取りかへすために強い努力をしながら書齋の方へ歩いて戻つて、腰をかけた。
『多分お前の方が正しいだらう』彼は嘆息して言つた『併しそれは實に異常な光景であり又何うも説明が付かない。新聞はそれに就いても何も言つてゐないかしら』
『ノーマンさんがニュースに昨日その事を書いてゐらつしやいましたわ』

其二 異 状 の 光

『そうだ、書いてゐた。だがギャセットは一行も載せてゐなかつた。メイリー』マックスウェル氏は或新しい思想が突然彼を捕へたかのように復熱心な昂奮の再發と共に席を立つた『お前は何かね——いや併し、それは皆有りそうもない事だ。だが、ヴァチニヤとレーチエルが來たら訊ねて見よう。それからフェリシヤにも。彼女とステイフェンが來るだらう。彼等は今週はレーチエルのところに逗留してゐるんだ。彼等に會ふのも善いようだ。それからアレキサンダー、パワースとドクター、ウエスト。彼等

はあの光を見たに相異なる。屹度見たにちがひないよ！ それから監督——』マックスウェルは、ちつと考へながら獨言した。『監督が生きてゐられたらなあ——きつと見なすつたにちがひない。きつと。私は皆に早く來るようにと言つておいたんだよ、メイリー。あ、誰か來たようだ。』

戸口の鈴に答へてマックスウェル氏自身行つて、ヴァチニヤとレーチエルとフェリシヤとを案内した。

彼等が入つて來た瞬間マックスウェル氏は彼等の顔の深い興奮の色に氣付いた。

レーチエルが最初に口を開いた。

『あなた御覧になりました、マックスウェルさん』

『何を？』

『あの光！』

『此間から度々空に出たあれでせう。あの——』

『でも今夜のは従前にない見事でしたわ、此處へ来る途中で私達みんなそう感じましたの。』

『みんな？』

『え、みんな見たんですもの。』

『ステイフエンは何處へ行きました？』

『今参ります。レクタンダルの窓扶斯の豫防注射のことで話があると言つてドクター、ウエストのところへ寄りました。』

『あなた方はあの光を何う思ひます？』マックスウエル氏は暫くしてレーチエルとヴァデニヤの二人に話しかけた。

二人の友達は極めて眞面目な調子で互に顔を見合つてゐたが、ヴァデニヤが言つた――

『生れてからあの様なものを未だ見たことがありませんわ、あれには何かしら普通

のものではないところがあるんですもの。何だか怖いようです。今晚此處へ来る途中で、私達まるで何かこう火に包まれてゐるような気がしました。』

『え、ほんとうに』レーチエルは熱心に、しかし低い聲で言葉を入れた。『ですけれどあなたお氣付きになつて、ヴァデニヤさん？ 私達の行き會つた人達は私達にあんなに不思議に見へるものにもまるで氣が付かないようでしたわね。』

『それや何うしてとせう？』マックスウエル氏は椅子から身を前に乗り出して、レーチエルやヴァデニヤにもわかるような昂奮した様子で語つた。

『何故だろう！』

『あれですわ、私達、ヴァデニヤさんと私とは實に驚くべき榮光の中に包まれたよ
うな氣がして、その光は誰れしも感じない者は無い筈だと思つたのに、それに、何も
異常なものなんか氣付かないのであるような人に随分澤山行き違つたんです。』

『唯、』とヴァデニヤは熱心に口を入れた。

「時々誰れかゞ立止つて何か叫びながら空の方を指してゐたのをあなた覺へてゐらつしやらない、レーチエルさん？」

「えゝ、そうでしたわね」

「誰れだつたか知つてますか？ その光に氣付いた人達つてのは？」 マックスウエル氏は尙前かゞみになつて、わくわくするような興味をもつて訊ねた。

「いゝえ、私達にはよく見えませんでしたもの、見えて？ レーチエルさん。」

「マーサの聲がしたようでしたけれど、」とレーチエルは答へた。

「うちのマーサの？」 マックスウエル夫人が訊ねた。「多分そうかも知れませんわ。今しがたレクタンダルの教會のお集りに出るつて言つて出掛けたばかりですから、あそこでは木曜日のかはりに今晚集會があるんです、それにマーサはあそこの會員になつてからといふものそれは忠實なのですよ。」

「マーサでしたわ、間違ありません。」 ヴァアヂニヤは熱心に言つた「私達メインと第

三との角で行き遇ひましたの、そして私は止つて何か話し掛けようとした位なのですもの、奥さんロリーンの妹がこうして吾々のところへ来るようになったなんてまるで奇蹟のようぢやありませんの。ロリーンか死んでからたつた一年して、そして、レクタンダルの教會の献堂式の日マックスウエルさんが彼女に洗禮をお授けになるなんて、私マーサを見るたびにロリーンが眼に浮ぶんです可愛さうなロリーン」

泪がヴァアヂニヤ、ペーヂの兩眼から流れた、ヴァアヂニヤは此十七年間に殆ど變つてゐない。彼女は未だに結婚しないのである。容貌も心も美しく、年は経つても彼女の昔の基督者としての熱心は少しも減ることなく、彼女は今尙レイモンドの人民の幸福のために彼女の富と清められた才智を惜しげもなく費してゐる。ロリーンが、ヴァアヂニヤを生命がけて庇つて酒場の前に打ち倒されたあの日——そしてそれ以來幾年の間、ヴァアヂニヤは熱情的にそして神への最も深い献身の意から特にその町の婦人や娘達の生活に彼女自身を投じたのであつたが、その日からレクタンダルの全然形を變へて了つた

のを彼女は見た。夫もなく自分の子供もなかつたが、それにもかゝらずヴァデニヤはレイモンドの婦人の家庭生活や彼等が切實に求めてゐるものに關する諸問題にも完全な了解をもつて入つて行くように見へた。そして彼女は、彼等の社會上並に産業上の色々な状態を改革する上に於ての眞の大なる温泉として彼等から知られてゐたのであつた。レーチエルとフェリシャとは、ヴァデニヤに若し自分自身の家庭といふものがあつたら彼女は世界中で一番絶對的に素晴らしいそして完全な女となるであらうと、よく笑ひ笑ひ言ふのであつた。するとヴァデニヤは、面に美しい色を深めながら私には他の女等を助けて幸福な家庭をもたせるのが幸福なんですと答へるのが常であつた。彼女の胸の底に強く響いたところのものはロリーンのような女の悲劇であつた。それだから今マックスウエル夫人がマーサの事を言ひ出した時それはまたヴァデニヤに、彼女がロリーンを自分の家に連れてかへつてそれがもとで祖母が怒つて家を出て行つたあの日レクタングルの街をよろめきながら歩いて行つたロリーンの昔の姿

が幻影となつて浮んで來るのであつた。

其三 下女 マーサ

「マーサがレクタングルの教會員になつてゐるんですものね、奥さん！ 本當にロリーンが生きてゐてそれを見ることが出來たら何んなにか喜ぶことでせうに！ 私と一緒にゐる時お祖母さんが出て行つた後で、彼女はマーサのことや、シカゴの白娼賣買で自分が通つて來た身の毛のよだつような經驗に就いて話してゐましたつけが。何と云ふ奇蹟でせう！ そして、數多い女の中から彼女をこのあなたのところ置いてゐらつしやるなんて、まあ何て嬉しいこととせう、奥様！」 マックスウエル夫人の腕に衝動的に彼女の手を置いたときヴァデニヤの眼にはまた泪が一杯になつてゐた。「マーサのよな娘を見たことがあります」 マックスウエル夫人は深く感動しながら答へた。「シカゴであの娘が受けて來た様々の怖ろしい事は、全く嘘のようです。彼女は本當に言

語道斷な事を忍んで來たのです。自分が押込められてゐた家から遁げ出すことが出来なかつたとき、二度迄も自殺をしようとしたのですが。しかし今日では彼女は最も献身的な忠實なそして熱心なイエスのお弟子です。私はあの位の完全なキリストに對する愛を有つてゐる人を未だ見た事がないように思ひます。そして自分の教會を愛することゝ云つたら、彼女のその教會に對する絶對的な熱情を見ると私共心が責められるような氣がしますわ。グレーさんが彼處の事を萬事なすつてゐらつしやるのですが、若しあの方が最初お始めになつた通りにずん／＼と進んでゐらつしたら、教會の子供達や會員の數で母教會を凌いでしまふのはもう間もないことでせうよ、マーサ自身でさへあの教會に加つてから少くとも二十人も新しい會員を連れて來ましたもの。それから、臺所のこと、あんなによく氣の付く、注意深いそして手助けになる人は私まだ見たことがありません。私の『女中』問題は彼の娘が來てから一切解決されて了ひました。

「そうです」とマックスウエル氏は言つた。

「妻に『女中問題』に就いて何か話をさそうと思へばマーサのことを言ひ出しさへすればいゝんです。彼の娘が來てからうちには全く事無しなんです。」

「本當ですよ。」とマックスウエル夫人は熱心に同意した。「あの娘の宗教的熱誠は毎日私を恥かしくさせます。彼女はレクタングルの寄附金では二十五弗をもつて行つて筆頭に署名しました。宅ではあの娘に出来るだけ澤山、一週間五弗、拂ふんですが彼の娘は教會の仕事にその収入の十分の一献金しますのとして彼女はイエスを、まるで今日實際に生きてゐらつしやる方で、何時街の角などでひよつくりお眼にかゝらないとも限らないと云ふように信じてゐるんです。」

「して彼は今日生きてゐらつしやらないのかね？」マックスウエル氏は呟いた。「だが併し何處に？ 何處にだ？ そして何故再び地上にお住ひになつてはならないんだ——」レーチエルもフェリシヤもヴァデニヤも驚いて彼を眺めた。そしてマックス

ウエル夫人は前に二人で窓の前に立つた時したように、再その手を彼の腕に置いた。鈴が鳴つた。そしてマックスウエル氏は幻想から覺めたように立ち上つて戸口へ行つたがドクター・ウエストとアレキサンダー・パワースとステイフエン・クライドとを案内した。

彼等が室に入つた時彼等の顔にはレーチエルやヴァヂニヤやフェリシャの有つてゐたのと同じ眞面目さが表はれてゐた。

彼等は殆ど同時に話し出した。

「あなた見ましたか？」

「あの光」マックスウエル氏は叫んだが彼の聲は直ちに他の人々の聲によつて反響された。

「今晚のように美しく、又こゝものを包むように見へたことはなかつた。」とアレキサンダー・パワースが言つた。

十五年間パワースは彼の胸と心の中に色々な深いものを経験した。レクタンダでレーチエルの聲と響が、割戻金事件に於ける鐵道の法律違反を發見して後斷乎として彼の取るべき道を決定したあの夜から、アレキサンダー・パワースは試練の熔爐を通つて來たのであつた。一瞬間と雖彼は主に従ふことから踵をかへして遁げ出すことをしなかつた。併し彼の道は荒く又破れ彼の十字架は重かつた。しかも救主の愛の光は彼の偉大なる忍従の兩眼から絶間なく輝き出るのであつた。

「みんな見ましたかね？」マックスウエル氏は訊ねた。再び前の亢奮が起つて來た。

「さうです、吾々みんな、」

「驚くべきものでしたよ。」ドクター・ウエストは聲を低くして、しかし深い深い感情を以つて言つた。

ステイフエン・クライドはフェリシャの方へ行つてゐた。

彼とフェリシャとは完全な結婚生活を送つてゐた。彼等は何時までも常に互に戀人